

小坂町観光振興計画

十和田湖と環境・産業観光による小坂町の観光振興



康楽館



小坂鉄道レールパーク



十和田湖ひめます



小坂鉦山事務所

はじめに

小坂町長 細 越 満

小坂町は、青森県に接する秋田県の北東端、そして北東北三県のほぼ中央に位置しており、北東部には国の特別名勝・天然記念物に指定されている十和田八幡平国立公園の十和田湖があり、日本でも有数の自然に恵まれた地域です。

交通網では、東北自動車道と秋田自動車道が本町地内の小坂 JCT で接続し、それぞれの高速道路に小坂 IC と小坂北 IC を持ち、まさに北東北の観光拠点となっています。

歴史的には、文久元年(1861)年に小坂鉱山が発見されて以来、経済や文化も鉱山産業とともに発展し、現在は、古くから培われてきた鉱業技術を活用し、金属リサイクル産業への転換が図られ、世界的視野での資源循環型産業の町として注目を浴びています。

小坂町の観光資源として、東北でも有数の観光地である四季折々の景色を見せてくれる十和田湖と、鉱山が残した産業遺産である、明治の木造芝居小屋「康楽館」、小坂鉱山事務所、天使館など歴史と文化に彩られた近代化産業遺産の風格を残した建造物が多く現存している明治百年通りがあります。

さらに、廃線となった小坂鉱山専用鉄道の旧小坂駅舎及び構内施設等を活用した、「観て、学んで、体験できる」小坂鉄道レールパークを整備しました。

町では、「活用なくして保存なし」をテーマにこれら近代化産業遺産群の活用を図るとともに、十和田湖の大自然、資源循環型社会による環境への配慮、自然・環境・産業が調和した観光とまちづくりに取り組んでいるところです。

平成23年4月にスタートした「第5次小坂町総合計画」は、10年後のまちの将来像を「“ひと”と“まち”が輝く躍動する小坂～十和田湖と鉱山文化、人と自然にやさしい環境が新しい時代を築く～」としています。

そして、28年度からスタートした後期基本計画の観光分野の基本目標施策 多くの人を訪れる魅力ある観光のまち 実現に向けて、この観光振興計画の具体的な取り組みにより、町の観光振興を推進してまいります。

平成29年3月

目 次

はじめに

1. 計画の背景と目的	
(1) 背景と目的	1
(2) 計画策定のフロー	2
2. 観光を取り巻く社会的環境	
(1) 全国の観光振興に関する動向	3
(2) 観光需要に関する社会的変化	6
3. 小坂町の観光資源・施設の現状	
(1) 分類別観光資源・施設の一覧	8
(2) 観光資源・施設の分布	9
(3) 小坂町及び周辺地域の観光資源・施設の評価	12
4. 小坂町及び周辺地域の観光動向	
(1) 小坂町観光資源・施設別観光客数の推移	13
(2) 小坂町及び周辺地域の観光客数	14
(3) 東北6県の観光目的の入込客数(実人数)	16
(4) 東北6県の宿泊客数	17
5. 小坂町ヒアリング調査	
(1) 調査実施概要	19
(2) ヒアリング調査の結果	19
6. 小坂町に対するイメージ・ニーズ調査（インターネット調査）	
(1) 調査実施概要	22
(2) イメージ・ニーズ調査の結果	22
7. 小坂町観光の問題点・課題	
(1) SWOT分析	32
(2) 小坂町観光の問題点・課題	39
8. 小坂町観光振興計画の基本的な方向性	
(1) 小坂町観光の目指すべき姿	42
(2) 観光振興に関する基本施策	43
(3) 観光振興に対する展開方策	43
(4) 小坂町観光振興計画の体系	50
9. 最重点事業	
(1) 近代化産業遺産の活用	52
(2) 十和田湖の振興	58
資料編	71

1. 計画策定の背景と目的

(1) 背景と目的

小坂町は、江戸時代末期に銀鉱石が発見されて以来、鉱山の町としての歴史を歩んできたが、昭和 60 年代の急激な円高や鉱量の枯渇等により、小坂町内の鉱山は統廃合や閉山が相次ぎ、小坂町の経済に大きな打撃を与えた。現在は、古くから培われてきた鉱業技術を活用し、環境リサイクル産業へ転換が図られ、世界的視野での資源循環型産業の町として発展を続けている。

観光の面では、小坂鉱山の歴史・文化が息づく町としての特色を活かし、国指定重要文化財で近代化産業遺産※1でもある“康楽館”や“小坂鉱山事務所”等の歴史的建築物を中心に、地域の歴史や文化を観光資源とした観光振興を図ってきている。

しかしながら、観光を取り巻く社会環境の変化や消費者の価値観の多様化、特に平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災の影響などにより、小坂町に訪れる観光客は平成 26 年まで減少の傾向を示してきたものの、平成 26 年 6 月には廃線となった旧小坂鉄道の線路や設備を活用した体験型施設「観て・学んで・体験できる」小坂鉄道レールパークがオープン、台湾へのプロモーションの効果もあり、平成 27 年は対前年 5.2%増となった。なお、平成 28 年は康楽館や道の駅さか七滝の入込客数減少により、再び 90 万人を下回る結果となった。

観光入込客数(延べ人数)の推移

(単位:万人)

	H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	H28年
観光客数	137	129	125	117	87	92	87

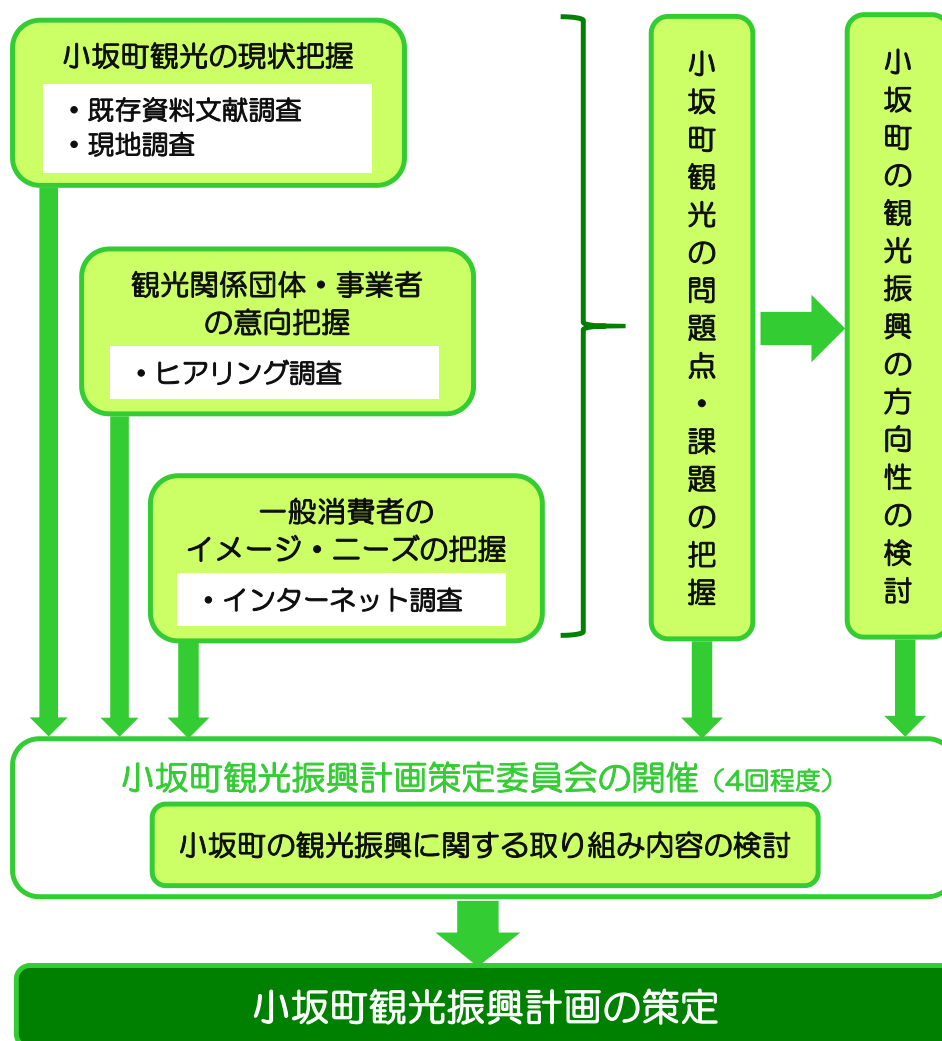
このような状況の中、平成 28 年 3 月に改定された「第 5 次小坂町総合計画（後期基本計画平成 28 年度～32 年度）」に掲げられている観光分野の計画実現に向けた、小坂町観光振興計画を策定することを目的とする。

※1 近代化産業遺産とは

我が国の産業の近代化に大きく貢献した産業遺産で、平成 19 年・20 年度に経済産業省において認定された。認定された遺産には建築物や機械、文書などがある。



(2) 計画策定のフロー



発荷峠展望台から望む十和田湖

2. 観光を取り巻く社会的環境

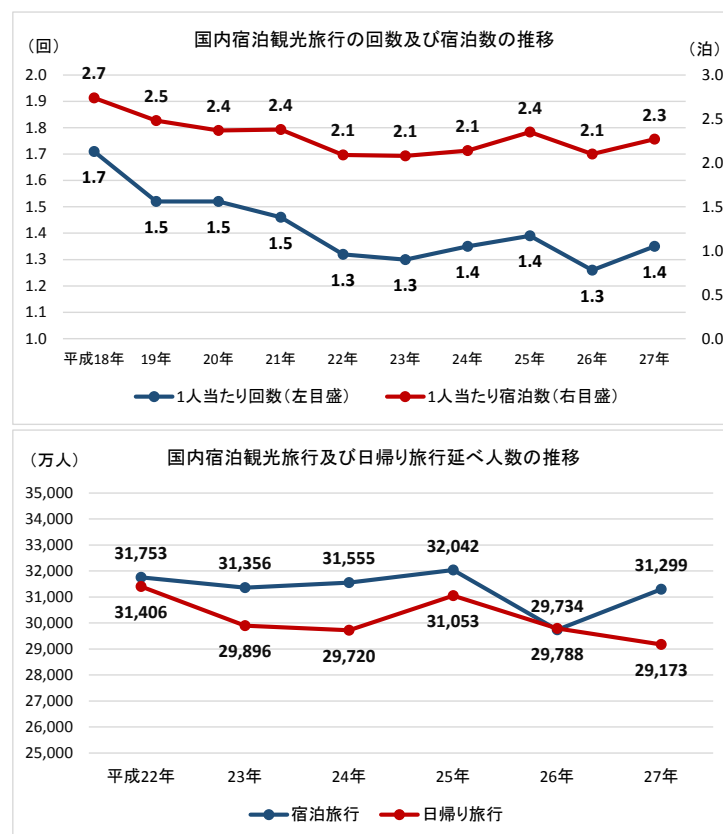
(1) 全国の観光振興に関する動向

① 国内旅行需要

日本人による国内観光需要は1990年代中盤より、長期的低迷傾向が続いており特に平成23年は東日本大震災の影響により前年を大きく下回っている。

平成27年においては、日本人の国民1人当たりの国内宿泊観光旅行の回数は1.4回（前年比9.8%増）、国民1人当たりの国内宿泊観光旅行の宿泊数は2.3泊（同12.3%増）だった。国民1人当たりの国内宿泊観光旅行の回数、国民1人当たりの国内宿泊観光旅行の宿泊数ともに、平成26年は同年4月の消費税率引上げの影響もあり減少に転じたが、平成27年は前年の落ち込みの反動もあり、再び増加に転じている。

一方、平成27年に国内宿泊旅行に行った人数は延べ3億1,673万人（対前年比6.5%増）となった。増加要因としては、前年の消費税率引上げによる落ち込みの反動、3月に開業した北陸新幹線の効果、9月の大型連休（シルバーウィーク）などが影響したためと考えられる。なお、国内日帰り旅行は延べ2億9,705万人（対前年比0.3%減）となった。

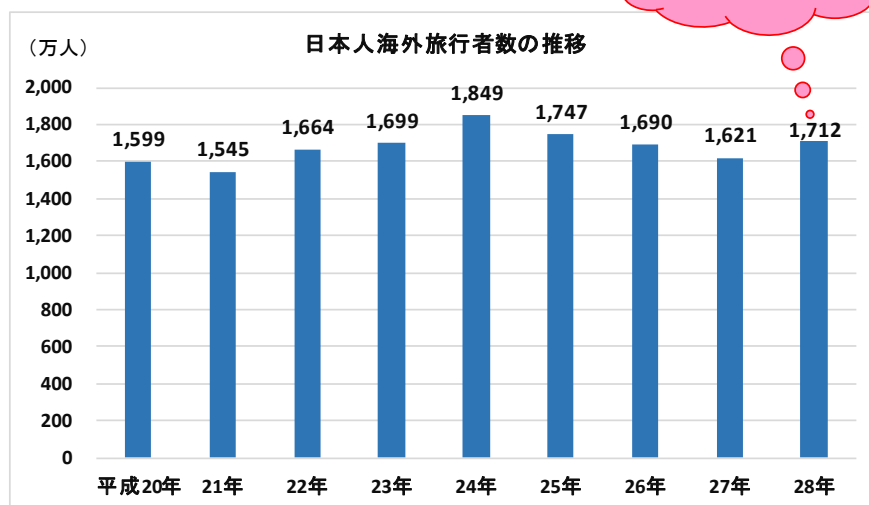


資料：観光庁「旅行・観光消費動向調査」

② 海外旅行の現状

日本人の海外旅行者数は、昭和 39 年の海外渡航自由化以降、年次によって多少の浮き沈みはあるが、一貫して増加傾向を示し、平成 24 年には過去最高の 1,850 万人を記録した。

しかしながら、平成 25 年以降は円安傾向もあり 3 年続けて減少し、平成 27 年は 1,621 万人とピーク時から 200 万人以上も減少している。なお、平成 28 年は対前年比で 5.6% 増の 1,712 万人と 3 期ぶりに 1,700 万人台に回復した。



※28年は法務省資料を基に日本政府観光局(JNTO)が算出

③ 訪日外国人旅行者の動向

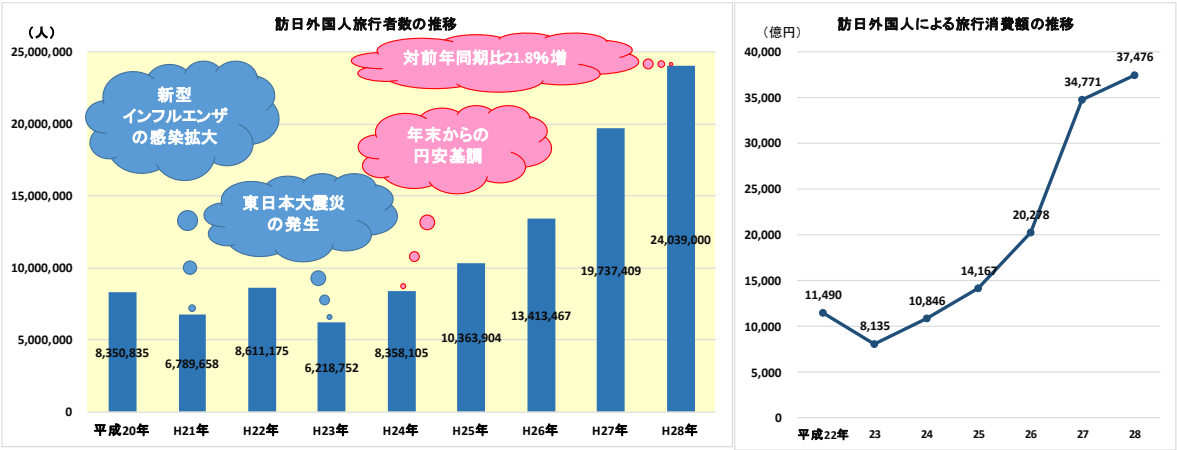
訪日外国人旅行者数は、平成 23 年は東日本大震災の影響により、前年を大幅に下回ったが、平成 24 年以降は円安基調も追い風となって着実増加し、平成 27 年は過去最高の 1,972 万人を記録し、政府の当初目標であった平成 32(2020)年に 2,000 万人を 5 年ほど前倒してほぼ達成することとなった。

これを受け政府は「明日の日本を支える構想会議」を開き、訪日外国人客数の目標人数を倍増させ、平成 32 年に 4 千万人、平成 42 年に 6 千万人にすることを決めたところ、平成 28 年は対前年 21.8% 増の 2,404 万人を達成した。

また、訪日外国人旅行者の日本国内消費額も平成 23 年以降増加傾向を示し、平成 26 年は 2 兆 278 億円に達し、旅行収支が 55 年ぶりに黒字化となり、さらに平成 27 年には 3 兆 4,771 億円、平成 28 年においても 3 兆 7,476 億円と対前年同期比 7.8% の伸びを示しているが、訪日外国人 1 人当たりの旅行支出は 155,896 円と前年同期比 11.5% 減と、中国人旅行者を中心とした爆買いにも陰りが見え始めている。

東北地域についてみると、安倍首相は平成 28 年 3 月 10 日の記者会見で、「平成 28 年を『東北観光復興元年』にする」と宣言。今後 5 年間については「復興・創生期間」と位置づけ、観光による復興に努めたいとした。その上で、東北 6 県の年間外国人宿泊者数

を、現在の約 50 万人泊から 2020 年までに 3 倍の 150 万人泊に押し上げる考えを示すとともに、東北へのツアー商品の造成増に向け、今後の 5 年間で海外の旅行会社から約 2,000 人を東北に招聘（しょうへい）する、大規模な「東北プロモーション・キャンペーン」も実施することを発表した。



出典：日本政府観光局（JNTO）

出典：観光庁「訪日外国人消費動向調査」

④ 訪日外国人旅行者の目的

訪日旅行の目的は、国籍に関係なく各国とも「日本食を食べる」が第一の目的となっている。

第二以降の目的に関しては、中国や台湾、タイなどの東南アジア系はショッピングに対して、欧米系の外国人に関しては、日本の歴史・伝統文化体験や日本の現代文化体験などを求める傾向がみられる。

国・地域別訪日旅行に関する意識〔今回したこと（複数回答）〕

	全体	韓国	台湾	中国	タイ	英国	ドイツ	フランス	米国	カナダ	オーストラリア
日本食を食べること	92.5	91.1	91.5	91.9	90.2	94.8	96.6	98.1	95.0	94.8	94.2
繁華街の街歩き	58.6	49.5	62.0	65.0	59.4	57.7	47.5	59.5	53.7	59.4	64.6
ショッピング	78.3	62.0	83.1	85.2	83.5	56.0	47.8	63.6	53.2	65.2	66.5
美術館・博物館	16.3	7.5	14.9	10.9	20.3	36.7	19.7	35.1	28.1	32.1	36.8
日本の歴史・伝統文化体験	23.3	10.2	20.6	15.6	25.8	39.7	37.4	47.5	46.2	47.4	48.6
日本の現代文化体験（ファッション・アニメなど）	13.8	6.6	11.5	7.3	16.9	28.2	20.2	35.7	26.4	32.0	33.3

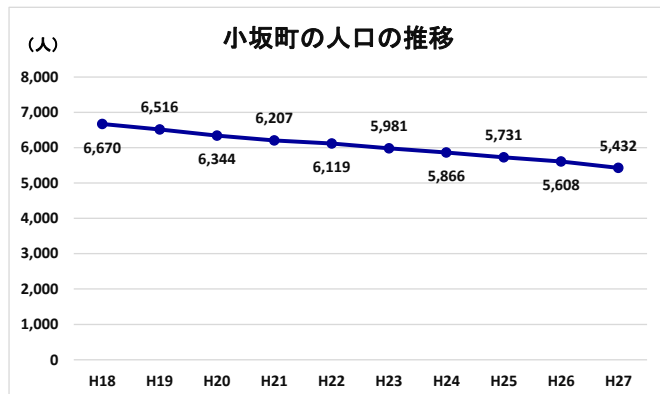
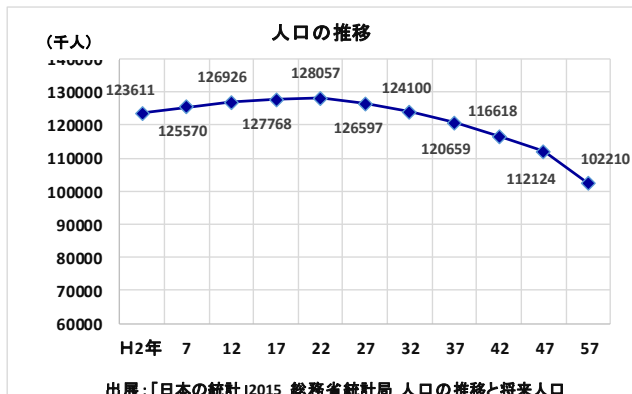
出典：観光庁「訪日外国人消費動向調査」（平成 26 年）

(2) 観光需要に関する社会的変化

①日本における人口減少と交流人口の増加

我が国においては、少子高齢化の進展により、平成 22 年をピークに人口減少社会に突入し、30 年後の平成 57 年には 1 億人程度まで減少するものと予想されており、多くの地域で人口減少による地域経済の疲弊が懸念されている。

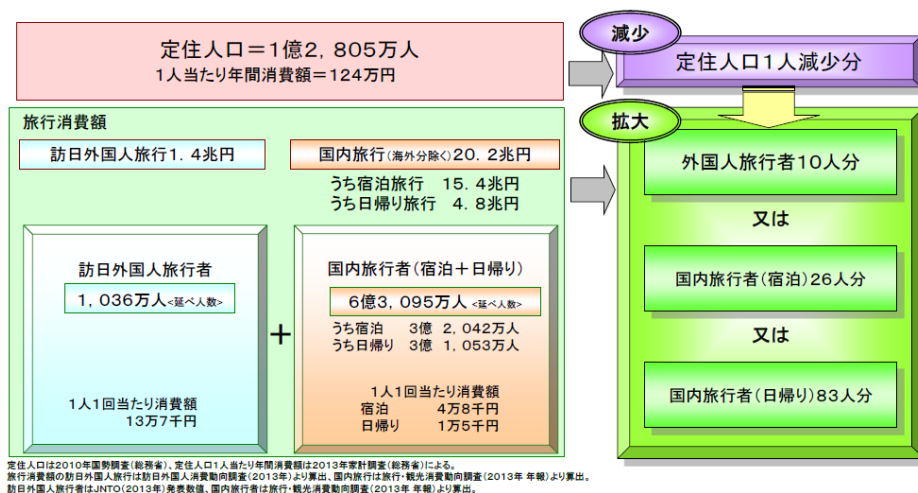
小坂町においても例外でなく、平成 18 年には 6,670 人の人口が毎年 100 人程度ずつ減少し、平成 27 年には 18 年から 1 千人以上減の 5,432 人となっている。



出典：秋田県年齢別人口流動調査結果

このように、人口減少社会を迎えた我が国においては、交流人口の拡大や、急速な成長を遂げるアジアをはじめとする世界の需要を取り込むことにより、我が国の経済が力強い成長を遂げると期待されている。観光産業は地域経済への波及効果が大きく、政府の新成長戦略の中においても観光振興が重要課題と位置づけられているように、小坂町においても交流人口の拡大による地域経済の活性化が大変重要な課題となる。

観光交流人口増大の経済効果（平成 25 年）



出典：観光庁

② 国内観光における競争の激化

このような中、これまで観光による交流人口の拡大にあまり熱心に取り組んでこなかった地域においても本格的に観光振興に取り組む自治体が増えてきている。今後、我が国の人口減少もあいまって、限られた観光需要の地域間争奪戦が激化することが予想されている。

③ 観光需要に関する価値観の多様化

高度情報化社会の進展により、旅行者のニーズも多様化してきており、エコツーリズムやグリーンツーリズム、工場夜景見学などの産業観光、アニメの舞台となった地を訪れる旅行、ファッションやスポーツと連携した観光など、いわゆるニューツーリズムが近年大変注目されており、全国各地で着地型観光に取り組む地域が増大している。

④ 物見遊山型の旅からテーマ型の旅へ

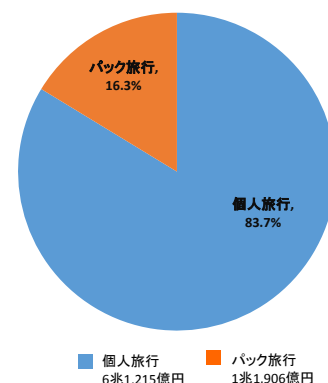
特に旅行形態に関しては、かつては旅行会社主催の大型観光バスによる、一度の観光旅行でできるだけ多くの観光地を足早に見て回る物見遊山的な観光が主流であった。これは日本人の勤勉さから、一度の観光旅行でできるだけ多くの観光地を見て回りたいという消費者のニーズが働いたものと考えられる。

しかしながら、近年では価値観の多様化により、一カ所に滞在し、自らの知的好奇心を満足させるようなテーマ性の強い観光旅行が求められるようになってきている。

	これまでの観光	これからの観光
旅の形	非日常型	生活体験型(異日常)
旅の目的	名所・旧跡、温泉、物見遊山型	テーマ性の強い旅
旅の形態	団体旅行	個人旅行
地域との関係	観光地が地域と乖離、 かいり 囲い込み	地域の生活エリアでの交流
旅の経済性	一点豪華型	リーズナブルなDIY型
集客	エージェン트에依存	地域が自ら情報発信・集客

⑤ 団体旅行から個人旅行へ

さらに旅行の同行者も、かつては旅行会社主催の団体旅行が主体だったが、インターネットの普及により、インターネット上で交通や宿泊などの予約手配が容易になったことや、インターネット系の旅行会社の台頭により個人向けの旅行商品が充実され、さらには消費者の価値観の多様化も相まって個人旅行にシフトしてきている。



出典：じゃらん宿泊統計調査
(平成 26 年)

3. 小坂町の観光資源・施設の現状

(1) 分類別観光資源・施設の一覧

小坂町の観光資源・施設の賦存状況を把握するため、公益社団法人日本観光振興協会の「全国観光情報データベース」を基に、下表3-1のとおり、カテゴリ別に観光資源・施設を整理した。また、表3-2、3-3では、小坂町のHPを基に、小坂町の主要な宿泊施設、飲食施設について、地区ごとにまとめを行った。

表3-1 主要な観光資源・施設（(公社)日本観光振興協会「全国観光情報データベース」より）

自然	歴史・文化	スポーツ・レクリエーション
国立公園十和田湖 白地山 七滝	明治百年通り 小坂鉱山事務所 康楽館 旧聖園マリア園「天使館」 赤煉瓦倶楽部 総合博物館「郷土館」 旧工藤家住宅「中小路の館」 あきたエコタウンセンター 和井内神社 十和田湖鐘の鳴る丘「樹恩の鐘」	小坂鉄道レールパーク 生出キャンプ場 十和田湖西湖畔遊歩道 白地山ハイキングコース 十和田ふるさとセンター 発荷峠展望台 滝ノ沢展望台 紫明亭展望台 笹森展望所 白雲亭展望所
温泉	その他	行祭事・イベント
十和田湖畔温泉 十和田湖西湖畔温泉	道の駅こさか七滝	十和田湖湖水まつり 小坂七夕祭 小坂町アカシアまつり 十和田湖冬物語 小坂・鉄道まつり クリスマスマーケットinこさか

表3-2 主要な宿泊施設（小坂町HPより）

十和田湖大川岱地区	十和田湖休平地区	中央地区（町市街地）
レークサイド山の家 十和田プリンスホテル 十和田ホテル 招仙閣（民宿） さくら荘（民宿） さざ波山荘（民宿）	十和田湖レークビューホテル 賑山亭 とわだこ遊月 岩蔭（民宿） 和み（民宿）	小坂ゴールドパレス 明月（民宿） 栗平（民宿） ブルートレインあけぼの

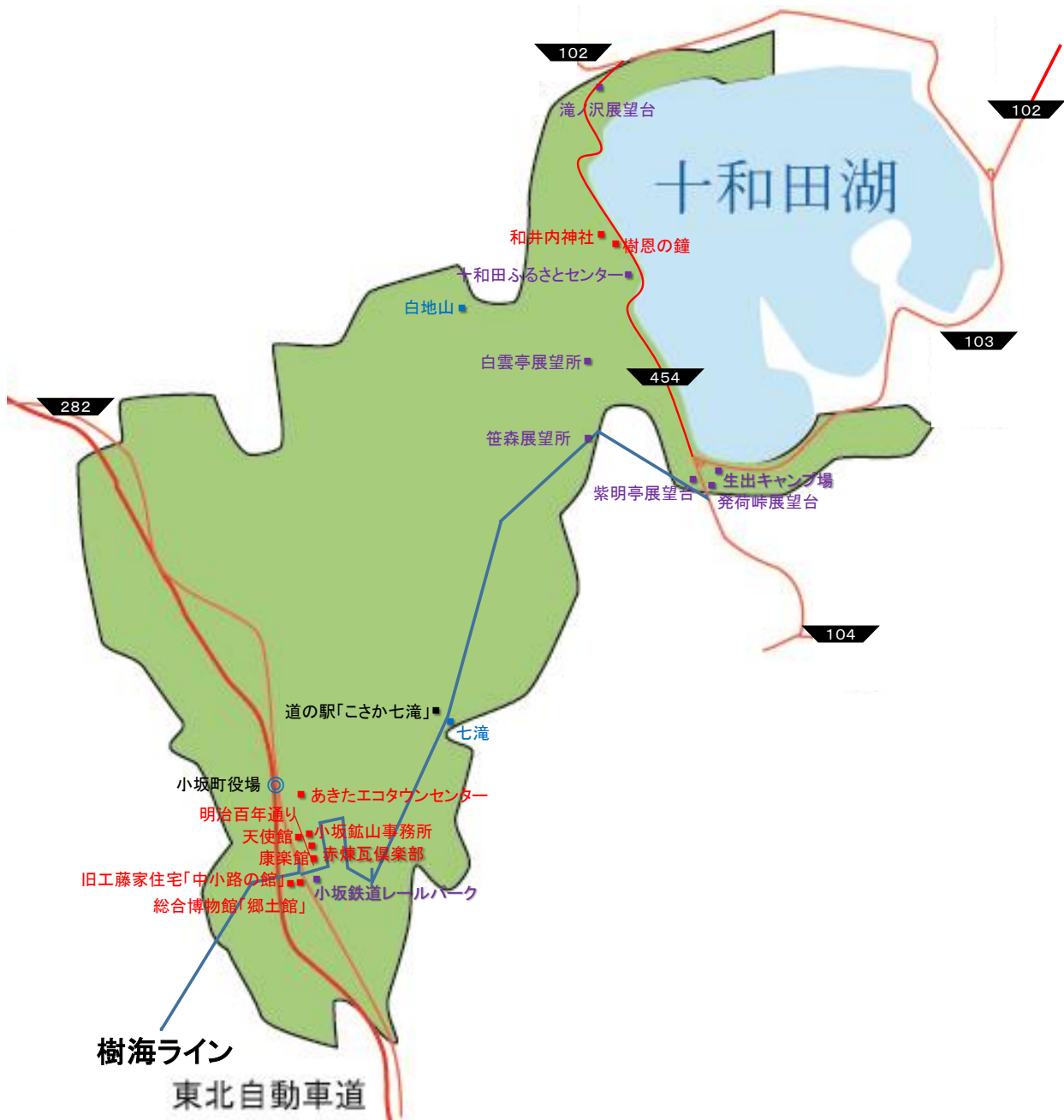
表3-3 主要な飲食施設（小坂町HPより）

十和田湖	中央地区（町市街地）	七滝
お食事処「岩蔭」 学校カフェ（ふるさとセンター内） 十和田プリンスホテル	レストラン「あかしあ亭」 レストラン「青銅館」 赤煉瓦倶楽部 日本料理「奈良岡屋」 みんなのお店「わいわい」 伊勢屋「大昌園」 とんかつ「栗平」 ホルモン「幸楽」 ドライブイン「下野」	滝の茶屋「孫左衛門」

(2) 観光資源・施設の分布

○主要な観光資源・施設

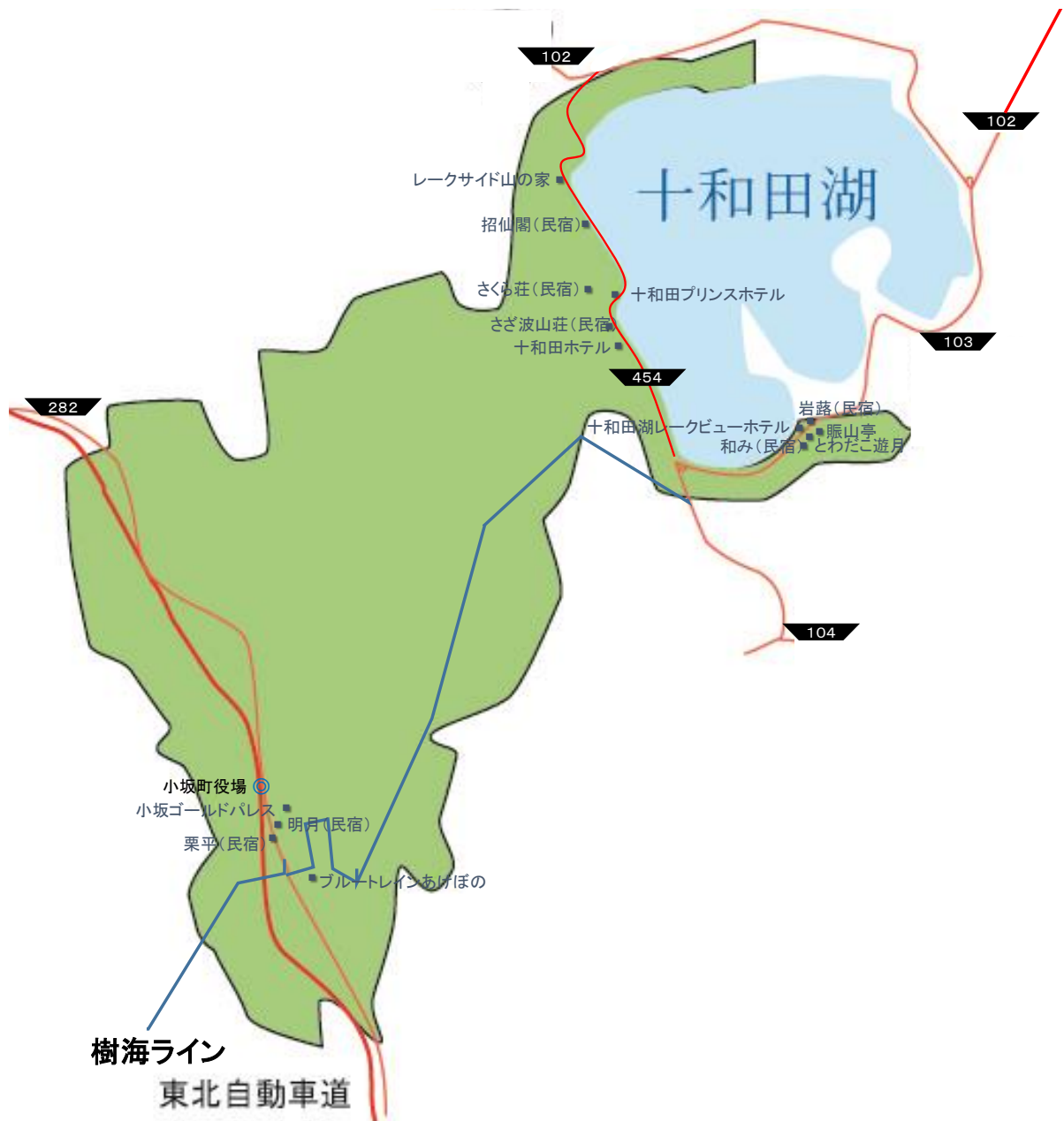
小坂町内の主要な観光資源・施設を地図上にプロットすると以下ようになる。歴史・文化的資源が町の中心部に集積し、十和田湖周辺には展望台やキャンプ場など自然を楽しむことができるレクリエーション施設が多く存在している。



※資源・施設は（公社）日本観光振興協会「全国観光情報ベース」に掲載のもの

○主要な宿泊施設

小坂町の主要な宿泊施設を地図上にプロットすると以下ようになる。宿泊施設は町の中心部と十和田湖周辺に集中しているが、十和田湖湖畔の宿泊施設に関しては冬期間休業となる施設も存在する。



※資源・施設は小坂町のHPに掲載のもの

○主要な飲食施設

小坂町の主要な飲食施設を地図上にプロットすると以下ようになる。飲食施設は町の中心部に集中しており、十和田湖周辺には飲食店が少ないが、十和田湖周辺の飲食施設では十和田湖特産の“十和田湖ひめます”を味わうことが可能である。



※資源・施設は小坂町のHPに掲載のもの

(3) 小坂町及び周辺地域の観光資源・施設の評価

○観光資源台帳による評価（平成12年3月）

小坂町内の観光資源・施設を評価するため、財団法人（現、公益財団法人）日本交通公社の観光資源台帳の評価基準に準じて評価を行ったものが表3-4である。

観光資源台帳では、十和田湖が最高ランクの評価を得ており、富士山や尾瀬ヶ原などと並んで、世界に誇れる日本を代表する資源に位置づけられている。観光資源台帳には掲載されていないものの、明治の芝居小屋である康楽館も十和田湖と同じく、世界から高い評価を得られる日本の代表的な資源に値すると考えられる。

表 3-4 観光資源台帳による評価（平成12年3月）

所在地	評価	SA	A	B
小坂町		十和田湖(湖沼) 康楽館(歴史的建造物)	小坂鉱山事務所(歴史的建造物)	小坂鉄道レールパーク(テーマパーク)
秋田県			鳥海山 角館のシダレザクラ(植物) 角館武家屋敷(歴史景観) 竿灯(年中行事) かまくら(年中行事)	駒ヶ岳(山岳) 田沢湖(湖沼) 奈曽の滝(滝) 法体の滝(滝) 雄物川(河川) 男鹿西海岸(海岸) 入道崎(岬) 桧木内川堤の吉野桜(植物) 秋田駒ヶ岳高山植物(植物) 後生樹の泥火山(自然現象) 玉川温泉の北投石と火山現象(自然現象) 玉川温泉の火山現象(自然現象) 大湯環状列石(史跡) なまはげ(年中行事) 大曲花火(年中行事)
全 国		富士山(山岳) 尾瀬ヶ原(湿原) 華厳滝(滝) 黒部溪谷(河川・渓谷) 日光杉並木(植物) 仁徳・応神天皇陵(史跡) 伊勢神宮(社寺) 姫路城(城跡・城郭) 白川郷合掌造り集落(歴史的建造物) 式年遷宮(年中行事) 国立歴史民俗博物館(博物館・美術館) 東京ディズニーリゾート(テーマパーク)		

※評価基準 SA:わが国を代表する資源で、かつ世界にも誇示しうるもの。わが国のイメージ構成の基調となりうるもの

A : SA級に準じ、その誘致力は全国的で、観光重点地域の原動力として重要な役割をもつもの

B : 地方スケールの誘致力を持ち、地方のイメージ構成の基調となりうるもの

※斜体字 日本観光振興振興協会の専門的な知見による評価

出典:財団法人日本交通公社 観光資源台帳(平成12年3月)



十和田湖



小坂鉱山事務所



康楽館

小坂鉄道

レールパーク



4. 小坂町及び周辺地域の観光動向

小坂町及び周辺地域の観光動向を把握するために、観光客の入込状況に関する分析を行った。

(1) 小坂町観光資源・施設別観光客数の推移

平成 23 年から 28 年までの小坂町の観光客数をみると、震災翌年の平成 24 年をピークに 2 年連続で減少し、平成 26 年は 87 万人となった。翌平成 27 年は 92 万人までに回復したが、平成 28 年には「康楽館」や「道の駅こさか七滝」の観光客数減少により、再び 90 万人を割り込み、87 万人となった。平成 26 年に開園された「小坂鉄道レールパーク」は 3 年目となる平成 28 年は前年を下回ったものの小坂鉱山事務所に次ぐ集客を見せており、今後小坂町の代表的な観光資源となることが期待される。

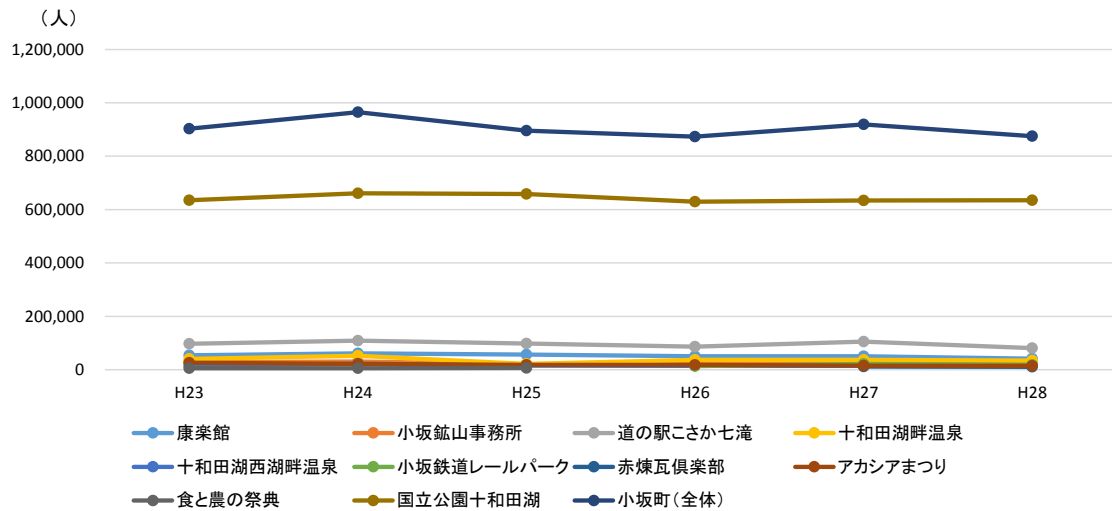


図 4-1 小坂町の観光地点・イベント別の入込客数（延べ人数）

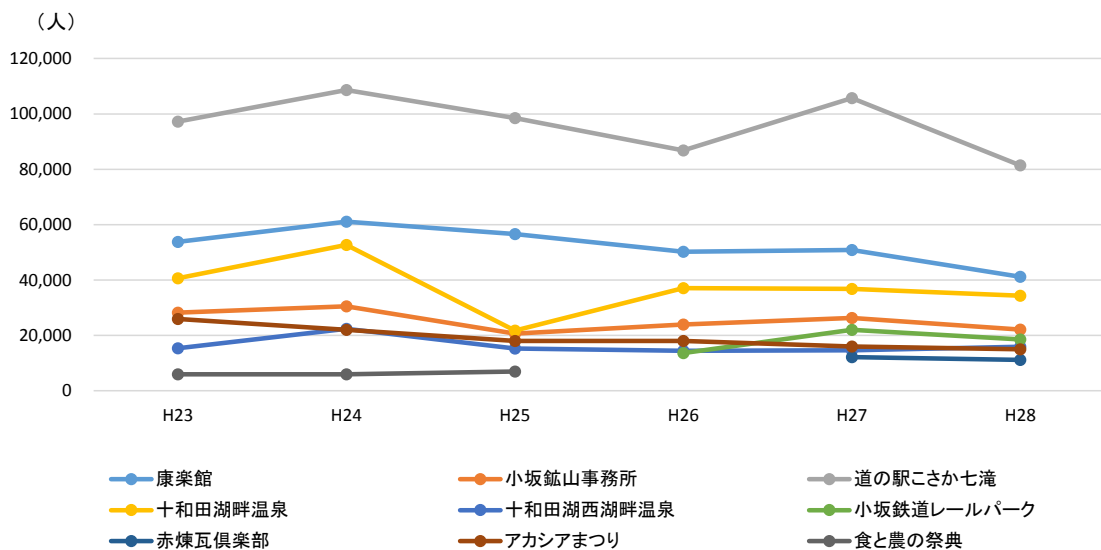


図 4-2 小坂町の観光地点・イベント別の入込客数（康楽館～食と農の祭典まで抜粋）

出典：秋田県観光統計

表 4-1 小坂町の観光地点・イベント別の入込客数

	H23	H24	H25	H26	H27	H28
小坂町(全体)	902,510	964,787	896,066	873,393	918,700	874,785
国立公園十和田湖	635,296	661,418	658,156	629,165	634,033	634,905
康楽館	53,802	61,128	56,655	50,194	50,907	41,237
小坂鉱山事務所	28,198	30,538	20,630	23,982	26,353	22,148
道の駅こさか七滝	97,261	108,649	98,526	86,862	105,682	81,462
十和田湖畔温泉	40,616	52,662	21,789	37,117	36,853	34,382
十和田湖西湖畔温泉	15,337	22,392	15,310	14,416	14,660	15,952
小坂鉄道レールパーク				13,657	22,060	18,562
赤煉瓦倶楽部					12,152	11,137
アカシアまつり	26,000	22,000	18,000	18,000	16,000	15,000
食と農の祭典	6,000	6,000	7,000			

(2) 小坂町及び周辺地域の観光客数

平成 23 年から 27 年までの観光客数の推移は、北秋田市が増加傾向にあるのに対し、小坂町、大館市は平成 25 年、26 年と落ち込みをみせたが、平成 27 年は 3 町市とも前年を上回る結果となった。また平成 23 年と比較すると、27 年では 3 町市間の観光客数の差が拡大している。

①観光客数の推移 (人)

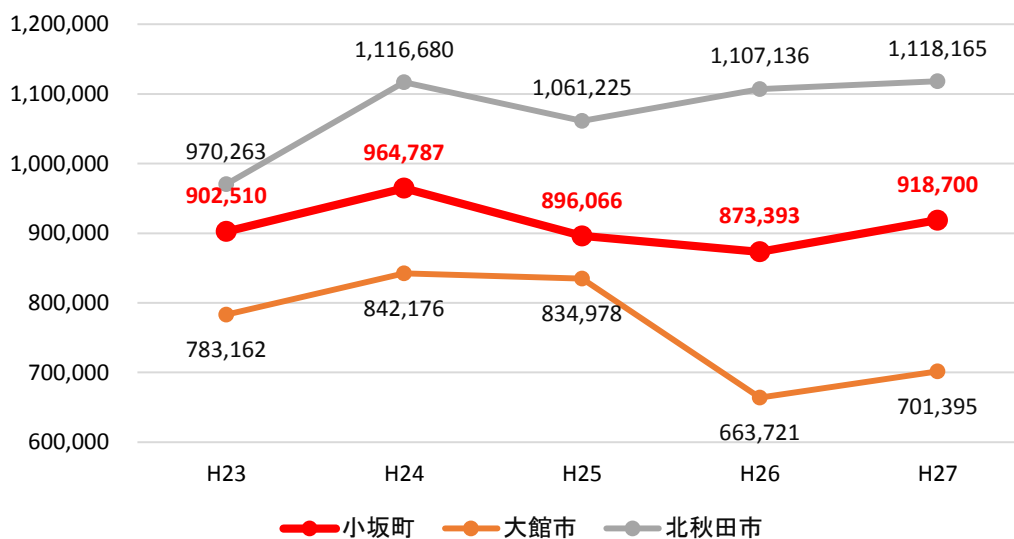


図 4-3 小坂町と周辺地域の観光地点等入込客数（延べ人数）の推移（人）

出典：秋田県観光統計

②月別観光客数

小坂町は8月、10月、5月に観光客数が多くなり、冬場は少なくなる。反対に大館市は冬場の観光客数の増加が見られ、北秋田市は他地域の観光客数が少ない11、12月にも一定数を確保している。この3町市はDMO組織である秋田犬ツーリズムの構成地域であり、他地域の弱いところを補完し合いながら、地域内での周遊性を高めていくことが求められる。

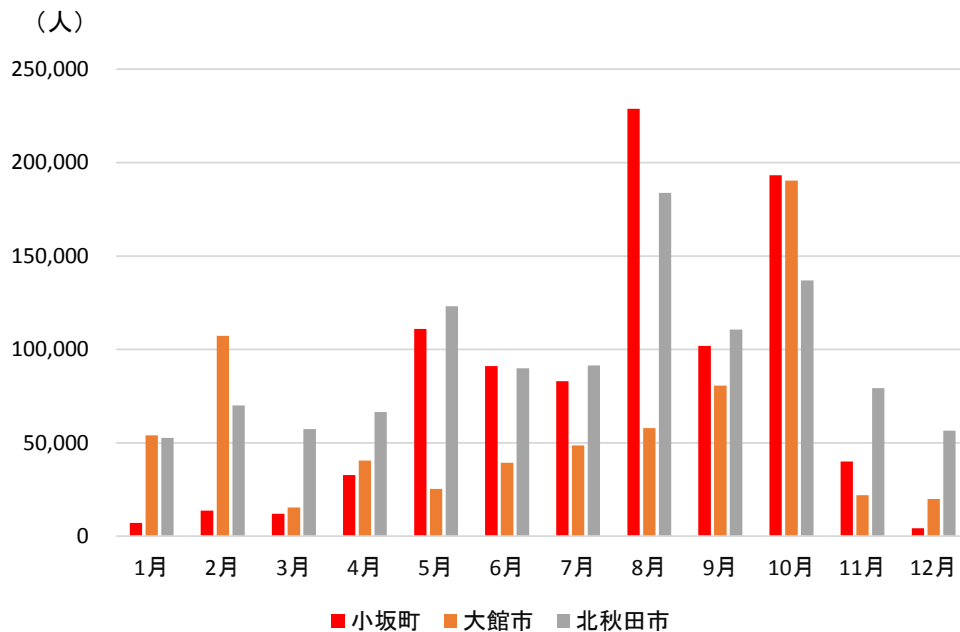


図4-4 平成27年小坂町と周辺地域の観光地点等入込客数（延べ人数）の月別推移（人）

表4-2 平成27年小坂町と周辺地域の観光地点等入込客数（延べ人数）の月別推移（人）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月
小坂町	7,126	13,769	12,102	32,714	110,933	91,056
大館市	53,939	107,321	15,411	40,529	25,322	39,374
北秋田市	52,710	69,939	57,410	66,416	123,079	89,901
	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小坂町	83,003	228,742	101,897	193,195	39,927	4,236
大館市	48,592	57,903	80,682	190,393	21,905	20,024
北秋田市	91,413	183,770	110,682	136,985	79,357	56,503

出典：秋田県観光統計

（３）東北６県の観光目的の入込客数（実人数）の推移

東日本大震災が発生した平成 23 年には東北地方全体で入込客数が減少している。平成 27 年において、震災前（平成 22 年）の数値を上回っているのは、宮城県と山形県のみである。秋田県はここ数年、大きな変化が見られず、平成 27 年においては東北地方の中で岩手県に次ぎ、入込客数が少ないという結果になっている。

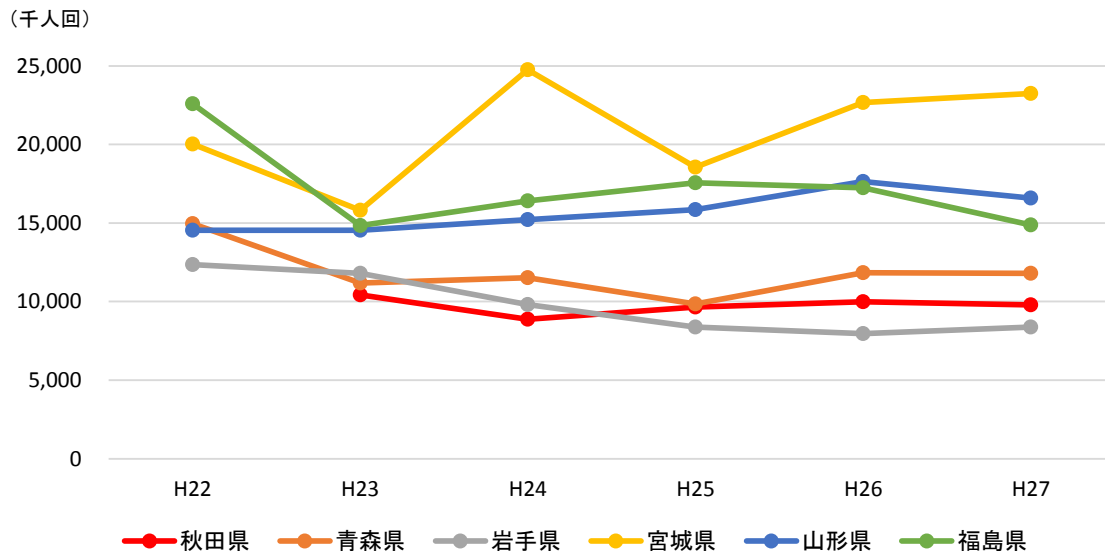


図 4-5 東北 6 県の観光目的の入込客数(実人数)の推移（単位：千人回）

表 4-3 東北 6 県の観光目的の入込客数(実人数)の推移（単位：千人回）

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
秋田県	—	10,436	8,883	9,645	9,998	9,798
青森県	14,956	11,180	11,528	9,856	11,846	11,794
岩手県	12,353	11,794	9,814	8,381	7,961	8,372
宮城県	20,035	15,816	24,750	18,561	22,673	23,256
山形県	14,542	14,544	15,224	15,848	17,650	16,585
福島県	22,593	14,838	16,408	17,561	17,242	14,870

出典：観光庁「全国観光入込客数統計」

(4) 東北6県の延べ宿泊客数

① 宿泊客数の推移

東北地方の延べ宿泊客数は、全体的に緩やかな増加傾向にある。秋田県は過去5年間、宿泊客数が東北地方で最も少ない。東日本大震災の影響で平成23年に落ち込んでからは、350万人泊前後で推移しており、平成22年時点ではあまり差がなかった青森県とは、平成27年には、150万人泊以上の差が生まれている。

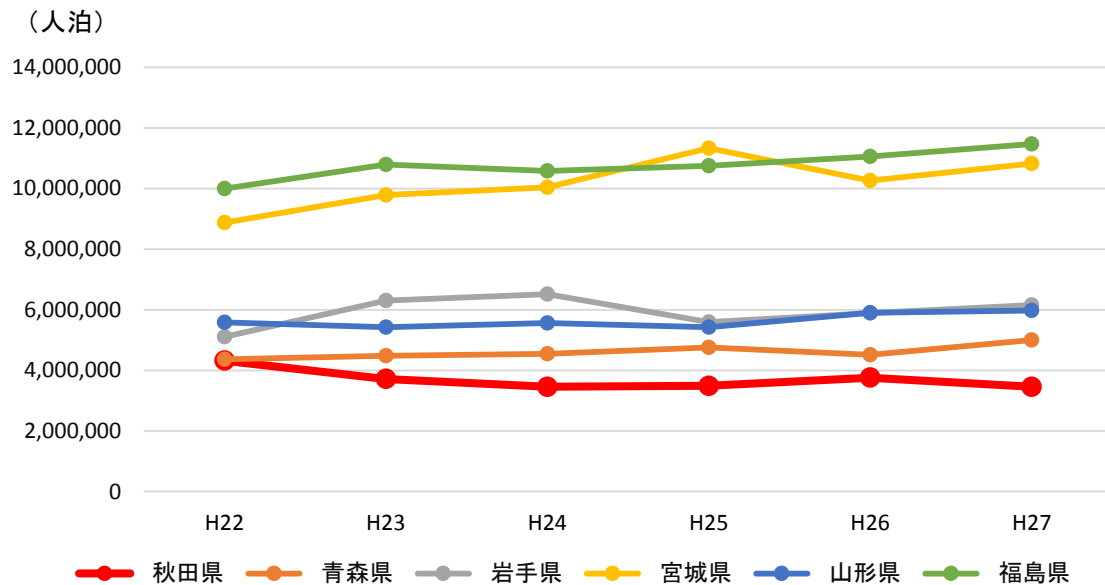


図4-6 東北6県の延べ宿泊者数の推移（人泊）

表4-4 東北6県の延べ宿泊者数の推移

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
秋田県	4,322,440	3,721,130	3,460,540	3,493,090	3,761,400	3,457,240
青森県	4,368,180	4,481,930	4,546,440	4,759,730	4,511,260	5,006,470
岩手県	5,109,660	6,306,100	6,517,240	5,590,690	5,888,980	6,156,280
宮城県	8,874,880	9,788,570	10,042,560	11,334,990	10,259,780	10,820,670
山形県	5,589,490	5,430,380	5,559,550	5,430,680	5,898,540	5,973,260
福島県	9,999,080	10,798,650	10,585,930	10,748,340	11,060,830	11,473,400

出典：観光庁「宿泊旅行統計」

②外国人宿泊客数の推移

外国人宿泊者数（延べ人数）は、地震の影響をうけ、平成 23 年に東北全体で大きく減少している。どの県も翌 24 年から徐々に回復し、平成 27 年には秋田県と福島県を除く 4 県で震災前の数値を上回る結果となった。秋田県は年々回復しているものの伸びが緩やかである。一方で平成 22 年には秋田県よりも外国人宿泊客数が少なかった青森県は、震災以前の延べ宿泊数から大幅に増加しており、秋田県とは大きな差が生じている。

日本全体では訪日外国人観光客が劇的に増加している中で、政府も 2020 年までに東北 6 県の外国人宿泊者数を 3 倍にすることを目標に掲げている。それにより、今後東北地方の外国人宿泊者数は増加することが期待されるが、その中で秋田県がどれだけ外国人を呼び込めるかが、大きな課題である。

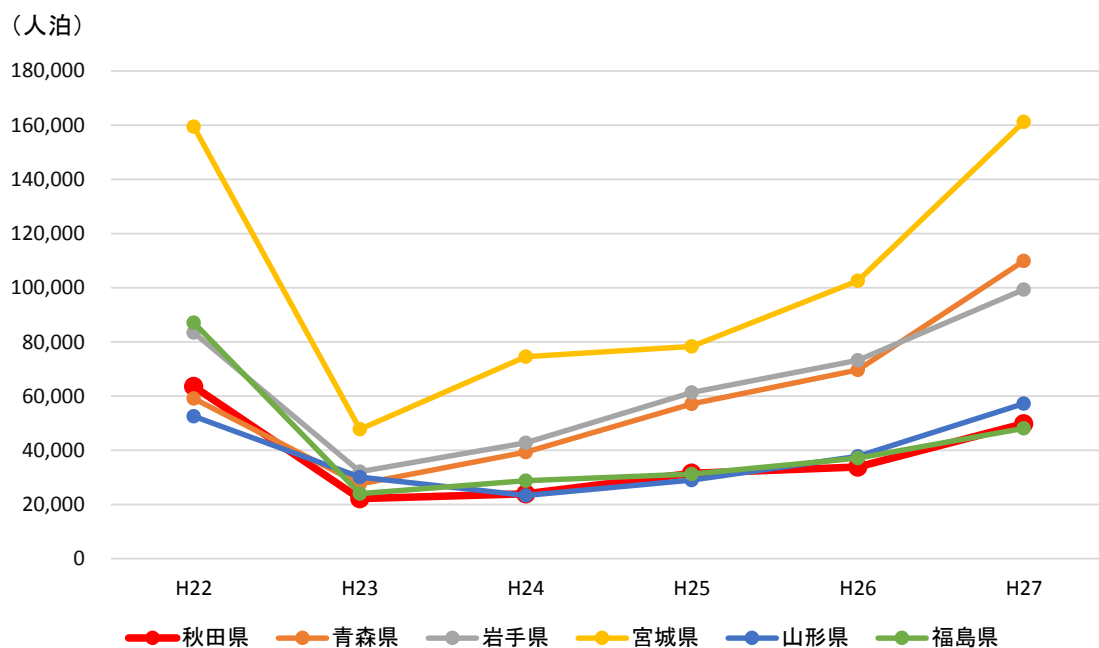


図 4-7 東北 6 県の外国人延べ宿泊者数の推移（単位：人泊）

表 4-5 東北 6 県の外国人延べ宿泊者数の推移（単位：人泊）

	H22	H23	H24	H25	H26	H27
秋田県	63,570	22,150	23,930	31,530	33,810	49,810
青森県	59,100	27,600	39,390	57,130	69,670	109,900
岩手県	83,440	32,140	42,790	61,330	73,220	99,360
宮城県	159,490	47,860	74,590	78,400	102,550	161,250
山形県	52,630	30,170	23,390	29,070	37,840	57,240
福島県	87,170	23,990	28,840	31,300	37,150	48,090

出典：観光庁 宿泊旅行統計

5. 小坂町ヒアリング調査

(1) 調査実施概要

小坂町の観光の現状や目指すべき方向性を探るために、小坂町及び周辺地域の観光関係者や観光関連団体（19 団体）に対してヒアリング調査を実施した。

日程	曜日	時間	ヒアリング先	時間	ヒアリング先
7月27日	水	14:15-15:00	康楽館茶屋		
		15:30-16:45	鹿角市産業活力課観光交流班		
7月28日	木	9:00-10:00	あきたエコタウンセンター	10:00-12:00	大館市観光協会、秋田犬ツーリズム
		11:00-11:50	十和田ホテル		
		13:20-14:10	十和田湖増殖漁業協同組合	13:20-14:10	鹿角蜂園
		14:20-15:10	脈山亭	14:20-15:10	道の駅さか七滝
		15:20-16:10	十和田湖国立公園協会	15:20-16:10	康楽館
		16:20-17:10	とわだこ遊月	17:00-17:30	自然公園財団 十和田支部
7月29日	金	13:15-14:00	ハートランドマーケット		
		14:10-14:30	小坂鉄道レールパーク		
		15:00-15:45	十和田八幡平観光物産協会		
9月14日	水	9:00-9:45	女性地域活動グループ		
		10:45-12:15	弘前観光コンベンション協会		
		14:30-15:30	小坂鉄道保存会		

(2) ヒアリング調査の結果

<小坂町の現状>

①観光客の動向

- ・小坂の中心部へは秋田市や、岩手、青森などの周辺県からのお客様が多い
また周辺地域の自治体旅行なども多い
- ・十和田湖へは関東など遠方からのお客様も多い
- ・高齢者が多いが、レールパークでは家族連れや、若い男性も多く訪れており、他の施設とは客層が異なる
- ・北海道からは修学旅行生もやってくるが、北海道新幹線の影響により、康楽館では例年に比べて3割減少した
- ・大型バスが減少しており、十和田湖や七滝周辺の客数の減少に影響を与えている
- ・七滝の道の駅には十和田湖観光の移動中に立ち寄る人が多いため、十和田湖の活性化が、小坂町の他地域への活性化につながる
- ・ヒアリングの中で観光客の増加が見られたのは十和田湖増殖漁業協同組合と小坂鉄道レールパークのみ
- ・十和田湖の衰退は著しく、その影響や震災の影響で小坂町の他地域も芳しくない
- ・町中を散策している観光客が少ない

②外国人観光客の動向

- ・外国人観光客はほとんど来ないという回答が多くの施設、団体から聞かれた
- ・三沢基地から米軍関係者が来ることはある
- ・小坂町を訪れている外国人は台湾の方が多く、施設・団体側も台湾をターゲットにし

ているところが多い

③全体的な現状

- ・ 5月、8月、10月が売り上げの上がる時期である
- ・ 十和田湖の宿泊施設をはじめとし、冬の間は営業していない施設が多い
- ・ 自然をウリにしたところや野外イベントでは天候に集客を左右されてしまう
- ・ 今年度から外国人観光客の受け入れ環境の整備として、町内の主要観光施設（康楽館、小坂鉱山事務所、小坂鉄道レールパークなど）で英語・中国語・韓国語による音声案内ガイドシステムを導入した

④連携

- ・ 個々の施設・団体レベルでの連携、他市町村や他県との広域連携ともにほとんどできていない
- ・ 「あけぼの」に宿泊すると、小坂町内の飲食店などで特典が受けられる
- ・ 秋田犬ツーリズム（小坂町、大館市、北秋田市）が発足されたことにより、広域連携に期待が生まれた
- ・ 鹿角市：文化も近いので連携しやすい
- ・ 大館市：関係が良的になってきたが、まだまだ情報共有が十分でない状態
- ・ 弘前市：津軽地域観光団体事務局連絡会議にて、秋田県県北地域2市町（小坂町、大館市）と青森県の中津軽地域7市町村が連携している

⑤問題点・課題・不満

- ・ 小坂町全体として通過型の観光になってしまっている
- ・ 十和田湖の客数減少により小坂の中心部も減少
（38年前に比べると、十和田湖に訪れる観光客数は1／4程度）
- ・ 十和田湖の廃業した施設が廃墟化していて景観を損なっている
- ・ 木が生い茂ってしまい、十和田湖の眺望が良くない
- ・ 十和田湖にはアクティビティがない
- ・ 二次交通不足が問題である
- ・ 十和田湖周辺にはコンビニが無く、働く人たちも観光客も不便さを感じている
- ・ 冬の経営が厳しい状態である
- ・ 集客力のあるイベントでも予算が削られてしまっている
- ・ 製錬所の中を見たいという要望が観光客から多く聞かれるが、対応できない
- ・ 道の駅、赤煉瓦倶楽部とも町の指定管理のため、両施設の広報は町のHPが主体となり、独自でのPR活動は行っていない
- ・ 町民が小坂町の観光に対して関心が薄い→ボランティアグループを結成するなど、町

を盛り上げようとする町民の動きが見られる

⑥行政に対する要望

- ・ 集客力のあるイベントをもっと開催してほしい
- ・ 資源を活かして付加価値を
- ・ 十和田湖では和井内エリアの活性化が必要

<周辺地域の現状>

①鹿角市

- ・ 観光客は震災前より減少
- ・ あんとらあへの観光客は横ばい（修学旅行や外国人の団体も多く来る、体験あり）
- ・ 外国人観光客は増加傾向にあり、アジア系がほとんどである
以前はメディア効果で韓国人が多かったが、現在は台湾人が増加している
- ・ 宿泊者を増やす取り組みとして、条件付きで宿泊補助を行っている
- ・ 秋田市や大館市とは連携していない（物理的な距離が遠い、文化が違う）
- ・ 盛岡と連携している

②大館市

- ・ 秋田犬を見たいという要望が多いこともあり、秋田犬がキラーコンテンツとなる
- ・ 大館市を代表する名産品は、きりたんぽ（大館市は本場（きりたんぽを料理として初めて提供したのが大館市の飲食店）、鹿角市が発祥の地）に比内地鶏、曲げわっぱがあげられる
- ・ 宿泊客が少ない（そもそも宿泊施設が少ない）
- ・ 大館市でも、大館・小坂鉄道レールバイクを運営している
- ・ 小坂町の小坂鉄道レールパークとの連携を図り、大館から小坂まで運行をしたいが、急勾配の問題や軌道整備（草刈り）の問題もあり実現は難しい

③弘前市

- ・ 「まちあるき」を観光の目玉としている
- ・ ボランティアガイドが100名ほどおり、ガイドのスキル向上にも力を入れている
- ・ 「ご当地検定」を流行で終わらせないための工夫を行っており、まちあるきガイドの確保やタクシー運転手の質の向上につながっている
- ・ もともと弘前市の多くの店で売られていたアップルパイを活用し、ガイドマップの作成やクーポンの発行などにより、街の活性化を図っている
- ・ 外国人観光客は台湾からのお客様が圧倒的に多い

6. 小坂町に対するイメージ・ニーズ調査（インターネット調査）

小坂町の観光に対するイメージ及びニーズを把握するために、東北6県・関東1都6県居住者を対象にインターネットによるアンケート調査を実施した。

（1）調査実施概要

＜調査期間＞

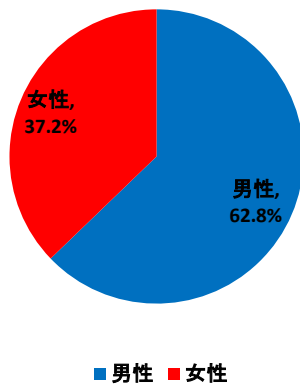
平成28年9月1日（木）～9月5日（月）

＜調査対象エリア＞

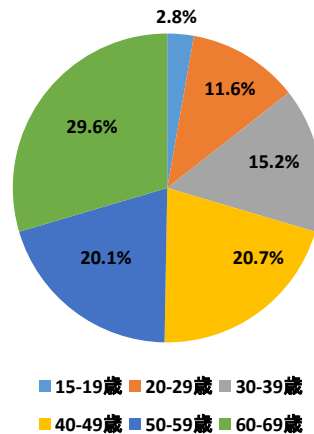
東北6県＋関東1都6県

＜調査対象者の属性＞

参加者の性別(N=541)



参加者の年代(N=541)

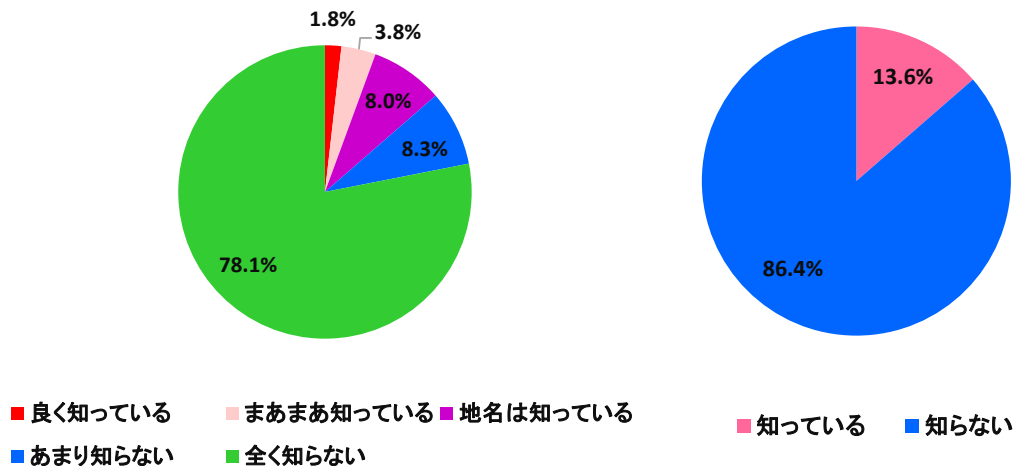


（2）イメージ・ニーズ調査の結果

＜小坂町の認知度＞

上記調査とは別に、1万人以上を対象に小坂町に対する認知度（出現率）を調査した結果、小坂町を知っていると回答した人は全体の1割程度であった。

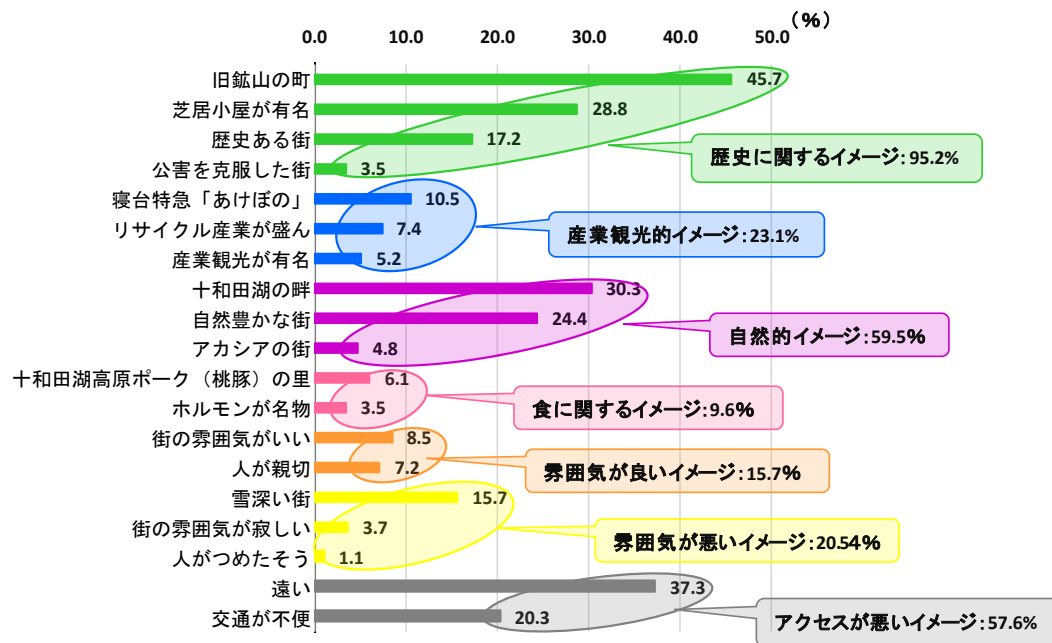
小坂町の認知度 (N=10,386)



＜小坂町のイメージ＞

小坂町を知っていると回答した 541 人に対して、小坂町のイメージを調査したところ、次のグラフのような結果となった。回答の中で一番多かったのは「旧鉱山の町」であり、他の項目からも歴史に関するイメージが多くもたれていることがわかった。十和田湖をはじめとした自然的イメージも強いが、小坂町が力を入れている産業観光のイメージはあまり高くなかった。また、「遠い」、「交通が不便」といったアクセスの悪さを小坂町のイメージとして回答している人も多かった。

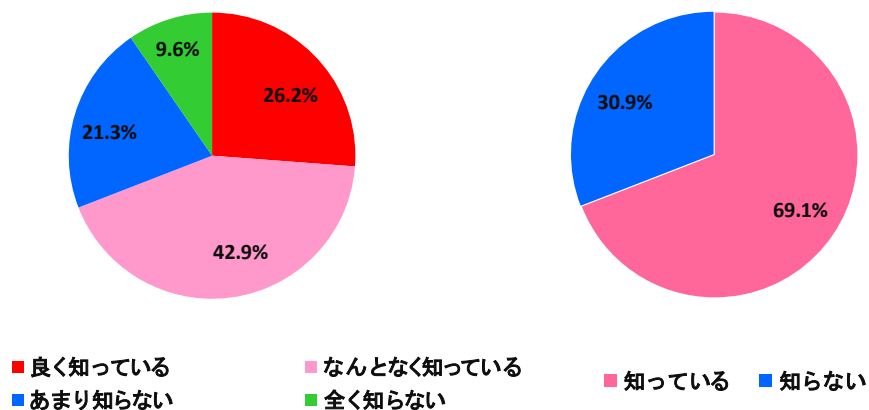
小坂町のイメージ(N=541)



＜十和田湖の立地に関する認知度＞

小坂町を知っている人の約7割が、十和田湖が青森県十和田市と秋田県小坂町の両市町にまたがって立地していることを知っているとは回答した。

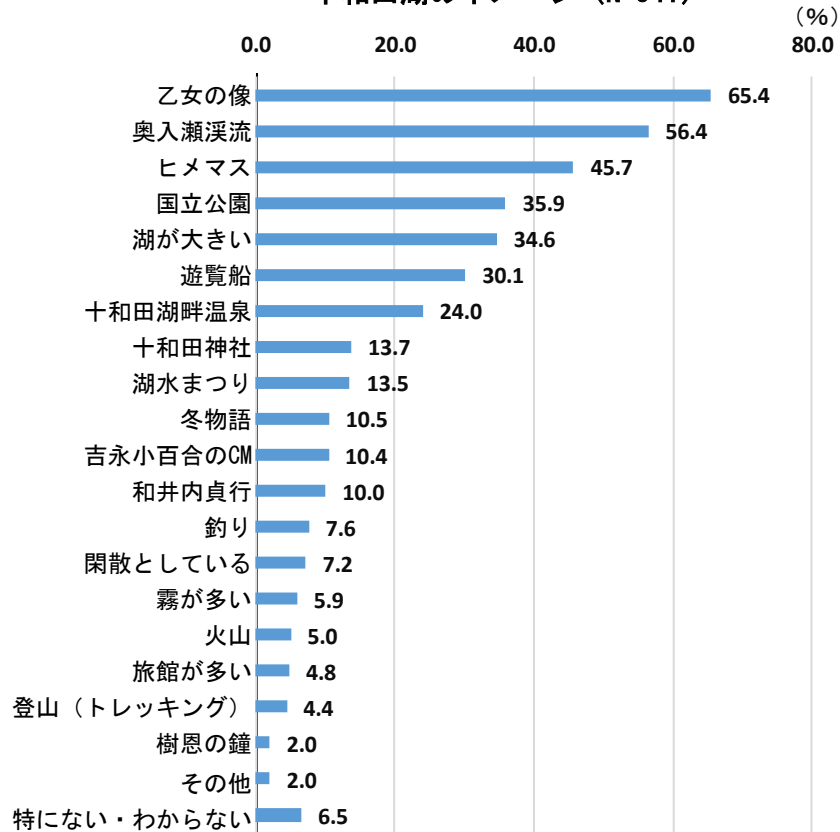
十和田湖の立地に関する認知度(N=541)



＜十和田湖のイメージ＞

十和田湖のイメージを聞いたところ、「乙女の像」、「奥入瀬溪流」という回答が半数を超えていた。次いで「ヒメマス」というイメージが強く、ヒメマス（十和田湖ひめマス）が十和田湖の名物になっていることがわかる。

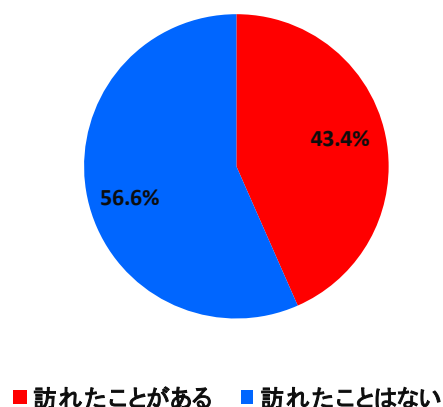
十和田湖のイメージ（N=541）



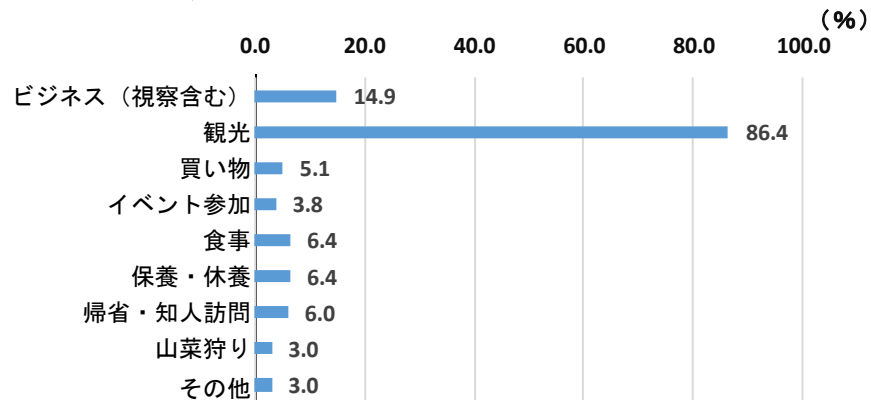
＜小坂町への来訪経験と目的＞

小坂町を知っていると回答した人 541 人の中で、小坂町を訪れたことがある人は 235 人（43.4%）であった。その中のほとんどが観光目的で小坂町に訪れており、その割合は8割を超えている。

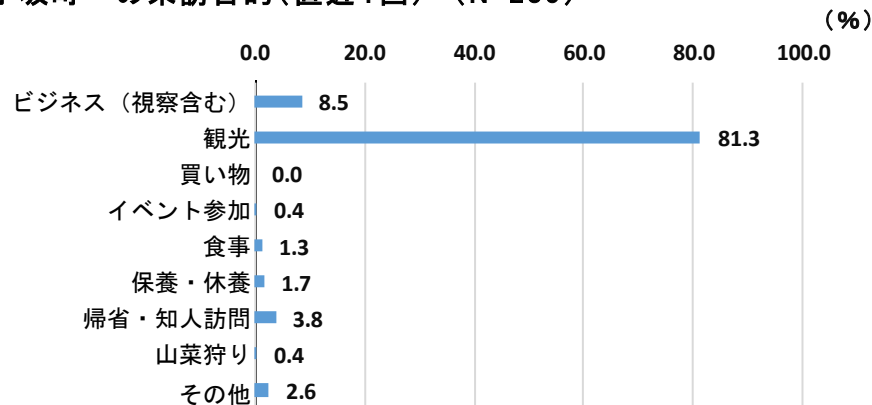
小坂町への来訪経験（N=541）



小坂町への来訪目的（N=235）



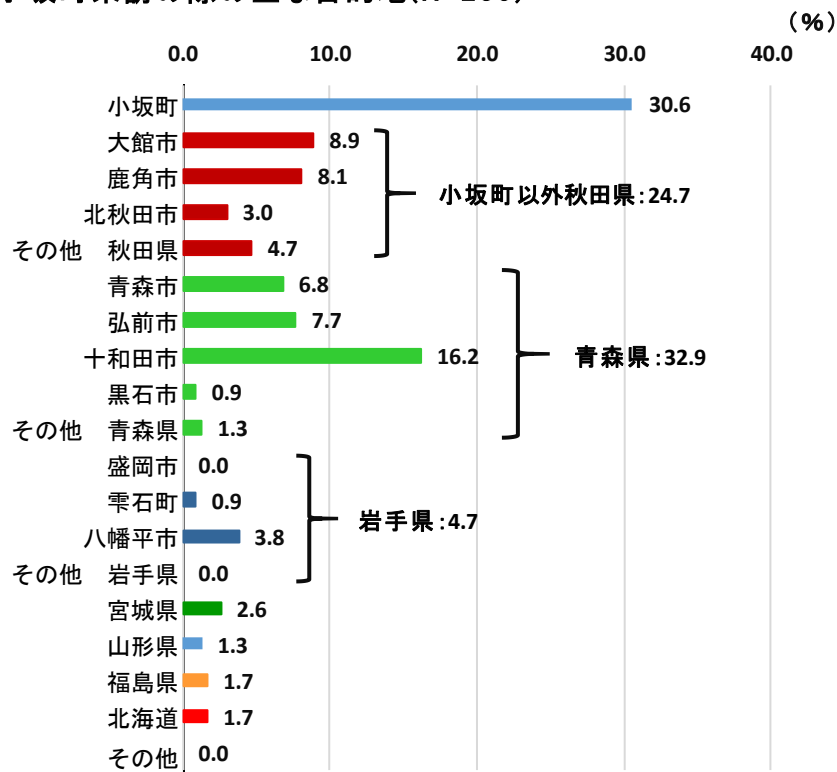
小坂町への来訪目的（直近1回）（N=235）



＜小坂町に来訪した際の主な目的地＞

小坂町に来訪したことがある人に、一番直近に小坂町を訪れたときの主な目的地を聞いたところ、次のような回答が得られた。一番多いのは「小坂町」であり、小坂町を目的として小坂町に来訪した人が多いことがわかった。次いで多い「十和田市」も含め、青森県への来訪を主な目的としながらも小坂町を訪れたという人が3割以上おり、小坂町以外の秋田県内を主な目的地とする人よりも多かった。

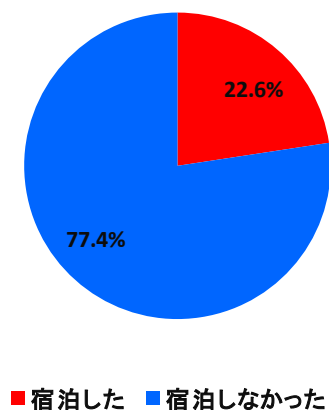
小坂町来訪の際の主な目的地(N=235)



<小坂町内での宿泊の有無>

先の設問では小坂町を主な目的地として小坂町を訪れたという方が多かったが、宿泊の有無を問うと、7割以上が宿泊していないことが明らかになった。

小坂町内での宿泊の有無 (N=235)

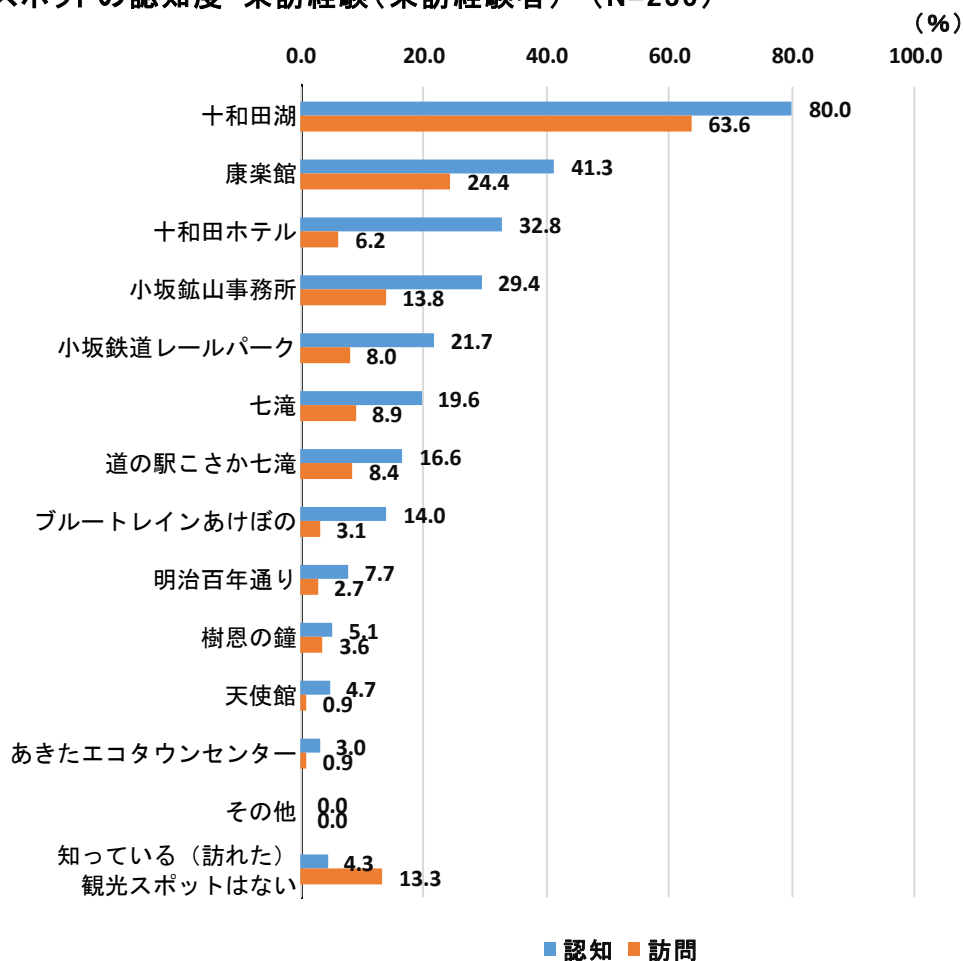


＜小坂町の観光スポットの認知度＞

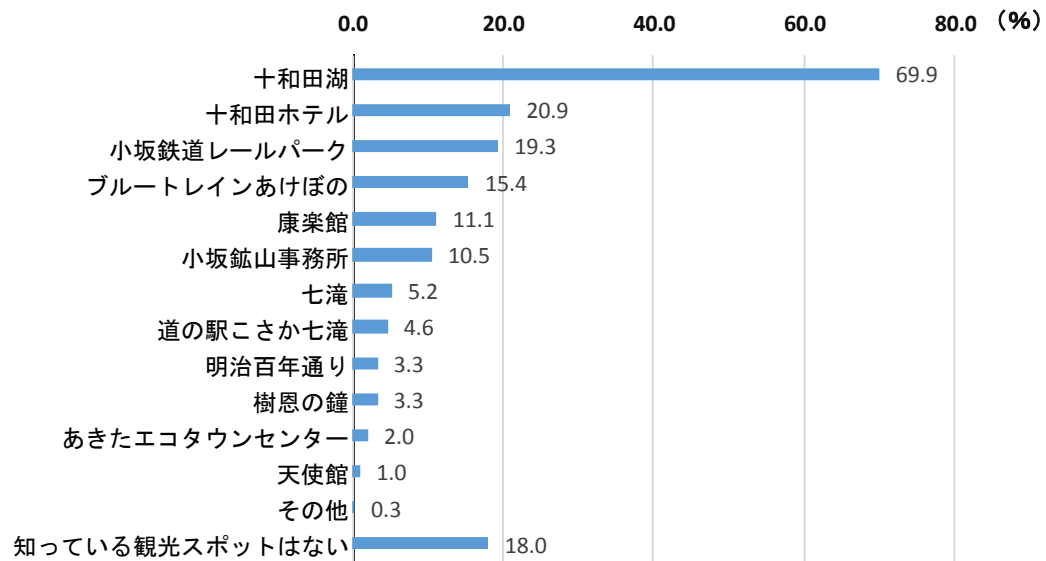
小坂町に訪れたことがある人に、小坂町の観光スポットの認知度と来訪経験を聞いたところ、次のような結果となった。「十和田湖」の認知度は8割であり、訪れたことがあるという人も多い。一方で十和田湖以外の観光スポットでは、「康楽館」で41.3%と半数近い人が認知していたものの、十和田湖に比べると低い結果となった。また来訪経験はすべて3割未満で少なかった。

小坂町に来訪経験のない人にも観光スポットの認知度を聞いたところ、やはり「十和田湖」が圧倒的に多かった。「康楽館」や「小坂鉱山事務所」の認知度は、来訪経験がある人に比べて低い一方で、「小坂鉄道レールパーク」や「ブルートレインあけぼの」といった小坂町の新名所の認知度が比較的高かった。来訪意向においてもこの2つは「十和田湖」に次ぐ支持を得ており、今後の小坂町の観光において重要な資源になってくると予想される。

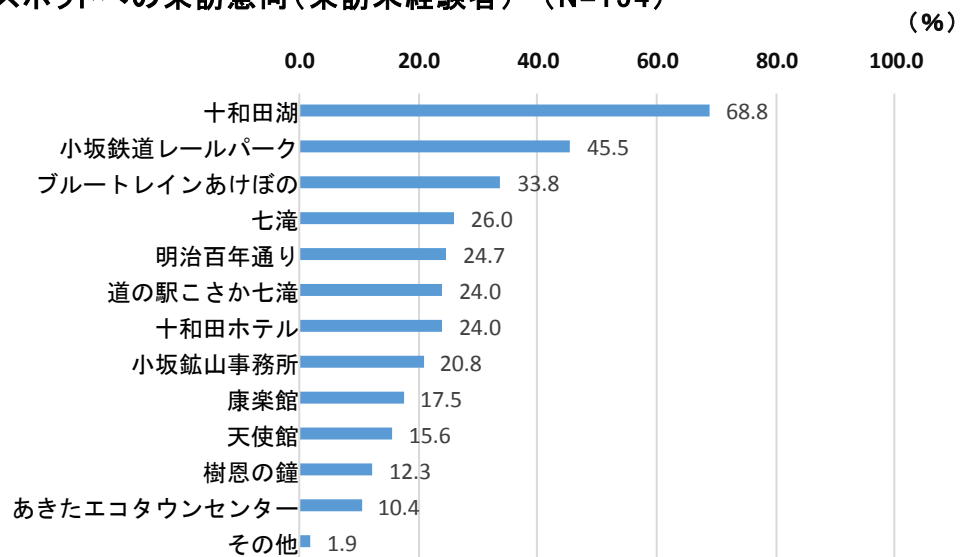
観光スポットの認知度・来訪経験（来訪経験者）（N=235）



観光スポット認知度（来訪未経験者）（N=306）



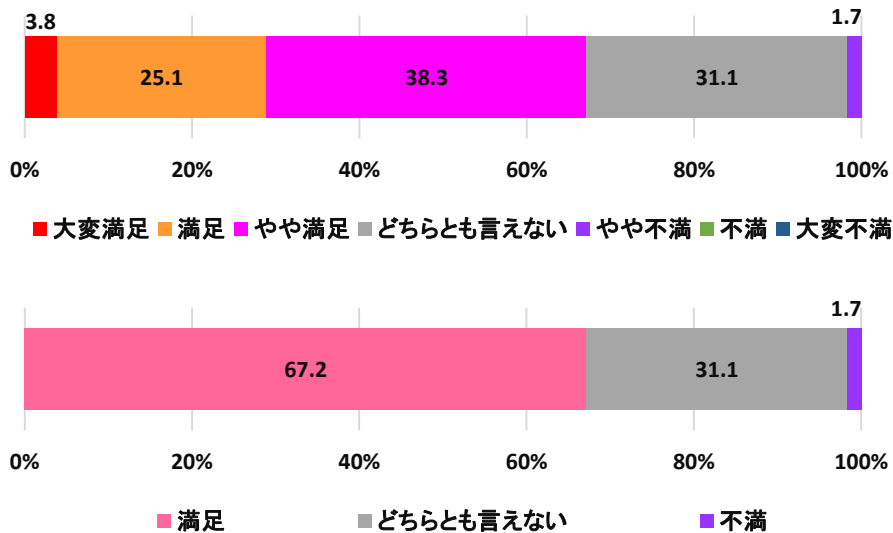
観光スポットへの来訪意向（来訪未経験者）（N=154）



＜小坂町への満足度＞

小坂町来訪経験者に小坂町への満足度を聞いたところ、7割近くが満足と回答した。不満を持っている人は2%にも満たないが、約3割いる「どちらとも言えない」人たちの満足させることができるかが、今後の課題である。

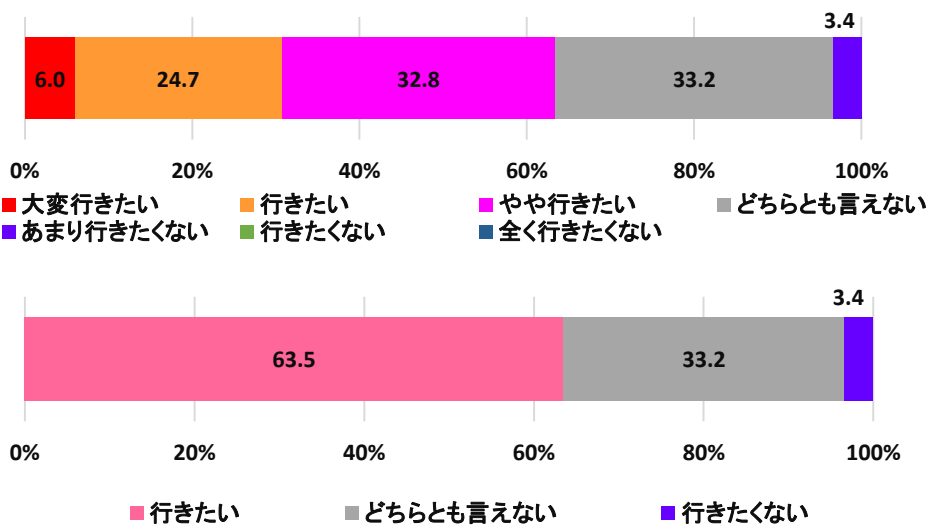
小坂町に対する満足度(N=235)



＜小坂町への再来訪意向＞

小坂町来訪経験者の再来訪意向は満足度と同様に高く、6割以上が小坂町にまた行きたいという意識を持っていることがわかった。「あまり行きたくない」という回答者が少数いたものの、「行きたくない」、「全く行きたくない」と回答した人はいなかった。

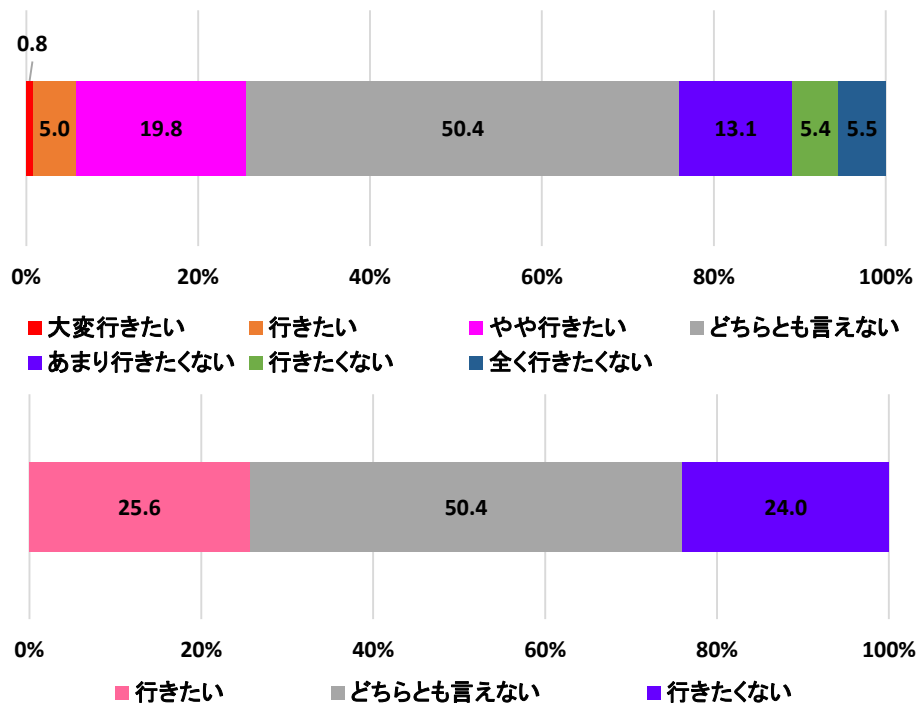
小坂町への再来訪意向(N=235)



＜小坂町への来訪意向（非認知者）＞

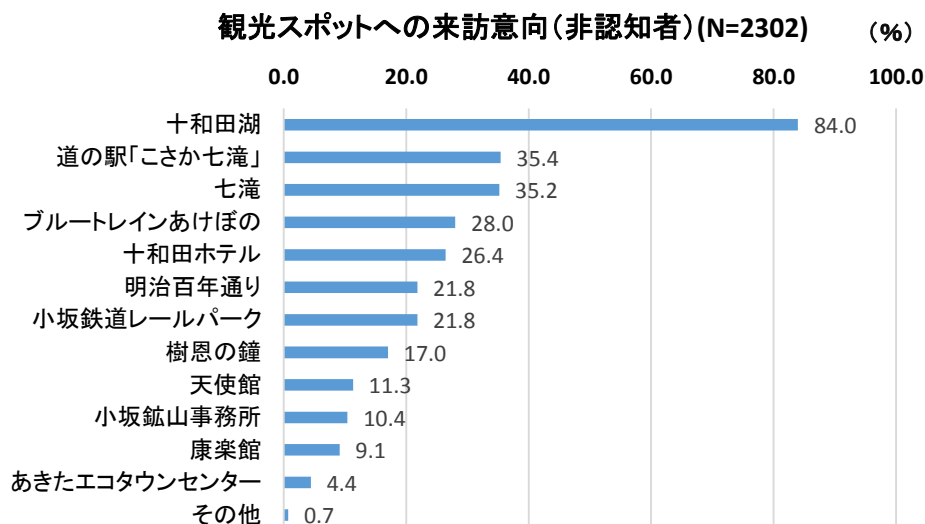
小坂町非認知者に対して、小坂町観光サイト「観光・近代化産業遺産」を見てもらったうえで、小坂町への来訪意向を尋ねたところ次のような結果となった。「どちらとも言えない」と回答した人が過半数を占め、「行きたい」が「行きたくない」よりも若干多かった。来訪経験者では満足度、再来訪意向が高いことを考えると、小坂町を知っている人にとっては行きたくなる町だが、知らない人にはあまり興味を持たれないということになる。小坂町を知らない人たちにどうすれば興味を持ってもらえるか考えていかなければならない。

小坂町非認知者の来訪意向(N=8977)



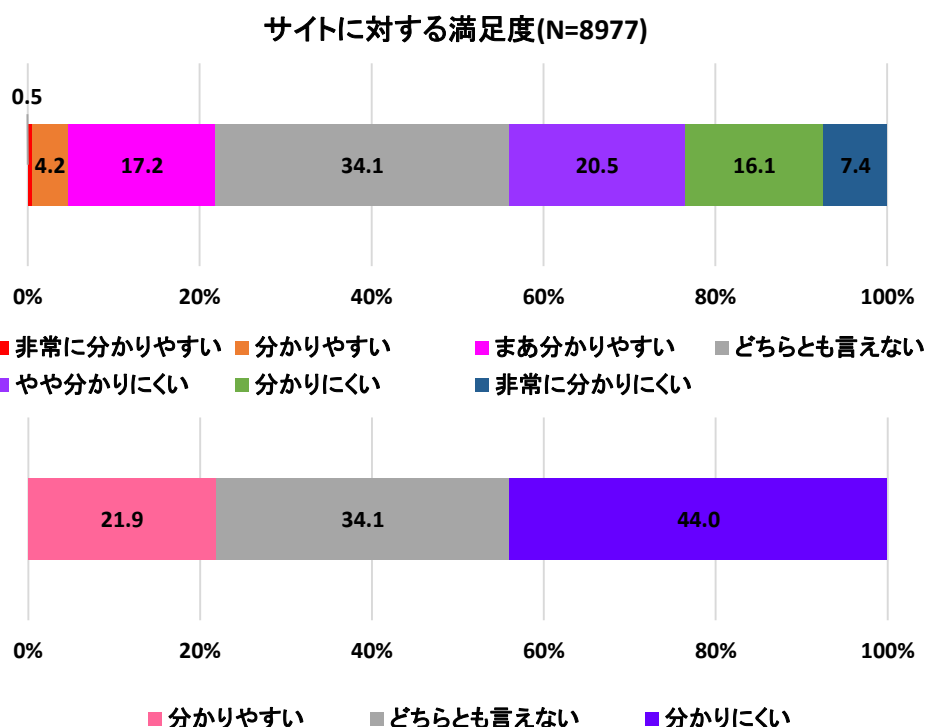
＜小坂町の観光スポットへの来訪意向（非認知者）＞

小坂町非認知者のうち小坂町への来訪意向を示した 2,302 人に対して、行ってみたい観光スポットを聞いたところ、次のグラフのような結果になった。やはり「十和田湖」が圧倒的に多く、「七滝」も人気が高かった。自然系のスポットの人気が高い一方で、「康楽館」などの小坂町の歴史的文化施設への意向は少なかった。



＜小坂町観光サイトに対する満足度＞

小坂町非認知者には小坂町の観光サイト「観光・近代化産業遺産」を見てもらったが、そのサイトの満足度を尋ねたところ、「分かりにくい」という回答が多かった。「非常に分かりにくい」と回答した人も7.4%、人数で言うと667人おり改善が求められる。小坂町を知らない人にとっては、観光サイトは重量な情報源であるため、分かりやすく町の魅力を伝え、小坂町に行ってみたいと思ってもらえるような工夫が必要となる。



7. 小坂町観光に関する問題点・課題

(1) SWOT分析※2

小坂町の観光を推進していくためには、小坂町の「強み」を活かし、観光市場の機会を勝ち取ることが最優先される。また、地域の「弱み」を克服することも重要な視点だが、単に弱みを克服するだけでなく、「弱み」を「強み」に転換するといった逆転の発想も重要である。

よって、ここでは前述の調査結果を踏まえ、小坂町の観光における「強み」や「弱み」、「機会」、「脅威」について以下のとおり整理する。

＜小坂町の観光に関する SWOT 分析＞

地域	強み (Strength)	弱み (Weakness)
	・地域の観光資源の強みは何か ・他に考えられる強みは何か	・地域の弱みは何か ・他に考えられる弱みは何か
	① 旧鉱山の町としての歴史、文化	① 小坂町に対する認知度が低い
	② 日本の近代化に貢献した「産業遺産」	② 小坂町へのアクセスが不便
	③ 明治の芝居小屋「康楽館」	③ 冬期間の休業
	④ 美しい自然環境	④ 観光関連団体間での連携が不十分
	⑤ 日本を代表する観光資源「十和田湖」	⑤ 観光業従事者の高齢化
	⑥ 宿泊施設としての「ブルートレインあけぼの」	⑥ 十和田湖への観光客離れが進む
	⑦ 魅力ある食べ物	⑦ 団体旅行・教育旅行の減少
	⑧ 環境に対する精神	⑧ 観光客誘致に対する環境が不十分
		⑨ 通過型の観光地で宿泊客が少ない
市場環境	機会 (Opportunity)	脅威 (Threat)
	・市場変化の機会はないか ・他に考えられる機会はないか	・競争相手の反撃の脅威は何か ・類似参入の脅威はあるか
	① 観光客の個人化・少人数化	① 本格的な人口減少社会の到来
	② 観光ニーズの多様化・成熟化	② 国内観光需要の地域間競争の激化
	③ 訪日外国人旅行者の急増	③ 訪日外国人観光客誘致の全国的取り組み
	④ 国立公園ブランド化のモデルに選定	④ DMO設立団体の増加
	⑤ DMO組織である秋田犬ツーリズムの設立	⑤ 十和田湖以外に7国立公園がモデル事業に選定
	⑥ 北海道新幹線の開業	⑥ 北海道新幹線の開業
	⑦ ミシュラン・グリーンガイドでの評価	

※2 SWOT 分析とは

目標を達成するために意思決定を必要としている組織や個人のプロジェクト、ベンチャービジネスなどにおいて、外部環境や内部環境を強み (Strength)、弱み (Weakness)、機会 (Opportunity)、脅威 (Threat) の4つのカテゴリで要因分析し、事業環境変化に対応した経営資源の最適活用を図る経営戦略策定方法の一つ。

＜小坂町の“強み”＞

①旧鉱山の町としての歴史、文化

小坂町はかつて鉱山によって栄えた町であり、小坂鉱山事務所はもちろん、福利厚生施設であった康楽館なども鉱山で働く人々とその家族のために建てられたものである。それらには優れた建築様式が用いられており、建築物としても高く評価



小坂鉱山事務所

されるとともに、移築改築され現在も現役の観光施設として活躍している。さらに、鉱山労働者のスタミナ源となったホルモンは今でも小坂町の食文化として町民に愛されている。また、十和田湖の住民や十和田鉱山労働者の食を確保するために私財を投げ打って養殖に成功した十和田湖ひめますなど、鉱山時代の歴史文化を今なお小坂町の随所で味わうことができる。

②日本の近代化に貢献した「産業遺産」

上記①でも触れたが、小坂町には鉱山時代の事務所や芝居小屋などの建造物が、移築、改築され今なお観光施設として活躍している。中でも康楽館は今なお常打芝居が行われている現役の芝居小屋であり、小坂町の代表的な観光資源である。他にも小坂鉱山事務所や天使館などが挙げられ、明治百年通りを歩けばレトロな雰囲気に包まれる。また、十和田湖エリアには国の



十和田ホテル

登録有形文化財である十和田ホテルがあり、康楽館や小坂鉱山事務所などとともに近代化産業遺産にも登録されている。十和田ホテルは秋田杉を使った美しいたたずまいをしており、建築物としての評価も高い。

③明治の芝居小屋「康楽館」

康楽館は鉱山労働者やその家族のための福利厚生施設として建てられたものである。その当時から現在（1970年～86年までは休館）まで公演が行われている明治の芝居小屋であり、観劇の外、回り舞台や切穴（すっぽん）などの舞台装置や楽屋などの館内見学も行われている。洋風の外観と伝統的な



康楽館

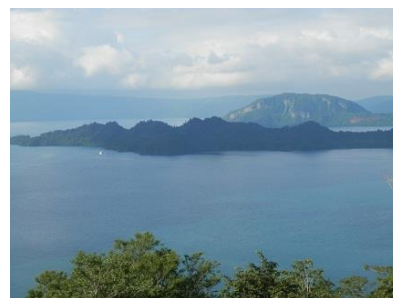
日本の芝居小屋の内装をもった和洋折衷のつくりをしており、国の重要文化財にも指定されている。康楽館は優れた洋風意匠を取り入れた現存の芝居小屋としては日本最古であり、今なお地域の人々や観光客に親しまれ、小坂町にとって大変重要な観光資源となっている。

④美しい自然環境

小坂鉱山の煙害により、一時は枯れ野原と化した一帯に、明治 42 年に初めて植林されて以来、小坂町に群生するアカシアは 300 万本以上と言われ、花の時期はアカシアの香りで並木道を通る人々を癒している。アカシア以外にも七滝や樹海ラインなど小坂町は美しい自然環境に恵まれている。

⑤日本を代表する観光資源「十和田湖」

十和田湖は全国的に有名な観光スポットであり、四季折々の景観を楽しむことができる美しい湖で、公益財団法人日本交通公社の観光資源台帳（SA 評価）やミシュラン・グリーンガイド（★）でも高く評価されている。十和田湖の知名度は高いものの、十和田湖＝青森県という認識が強く、小坂町にも接していることはあまり認識されていない。



十和田湖

⑥宿泊施設としての「ブルートレインあけぼの」

1970（昭和 45）年以來 44 年間、上野～秋田・青森方面を結び、観光客にはもちろん、ビジネス客にも親しまれた寝台特急「あけぼの」の客車が、第二の人生として小坂鉄道レールパークに設置され、宿泊施設として営業を開始した。廃車になった寝台列車に宿泊できるというのは興味深い取り組みである。既に、鉄道ファンをはじめ、多くのお客様に利用され、好評を博しているとともに、鉄道ファンの若い男性や家族連れなども多く訪れており、新たな客層の確保につながっている。



ブルートレインあけぼの

⑦魅力ある食べ物

鉱山で働く人々が活力をつけるために食べていたホルモンや、和井内氏が苦心してふ化養殖に成功した十和田湖ひめます、公害対策として植樹されたアカシアから採れるアカシアハチミツ、古くて新しい庶民の味「かつら一めん」など小坂町には独自の食文化がある。また桃豚や山菜、姫竹など自然豊かな環境の中で育てられた食材も小坂町の魅力である。

⑧環境に対する精神

鉱山時代、鉱山の煙害に悩まされていた人々は煙害対策としてたくさんのアカシア（ニセアカシア）の木を植樹して、現在は 300 万本以上のアカシアの木が群生しているといわ

れている。現在は、毎年 DOWA ホールディングス株式会社主催による、町民総参加の「小坂・ふるさとの森づくり植樹祭」が開催されている。また鉱山時代の技術を活かしたりサイクル産業も盛んで、あきたエコタウンセンターではエコに関する啓蒙（けいもう）活動を行っている。このような小坂町の環境への高い意識は、小坂町の強みのひとつである。

＜小坂町の“弱み”＞

①小坂町に対する認知度が低い

今回の調査において、小坂町という地名は認知度が低いという結果となった。全国的に知名度の高い十和田湖を有していながらも、十和田湖＝青森県というイメージが根強いいためか、小坂町の認知度は低い状態である。十和田湖方面だけでなく、町の中心部も含め、小坂町全体の観光をアピールし、認知度を上げていく努力が必要である。

②小坂町へのアクセスが不便

小坂町へは、東北自動車道小坂 IC からのアクセスが最も便利だが、自動車（自家用車やレンタカー）の利用以外にも大館駅や鹿角花輪駅、十和田南駅から路線バス、盛岡駅や青森駅からは高速バスなど多様な交通手段が存在する。

しかしながら、JR 在来線や高速バスの運行本数が少なく、乗車時間も長くなることや、町の中心部から十和田湖までの公共交通手段がないことなどから、運転免許証を返納された高齢者や訪日外国人など交通弱者にとっては必ずしもアクセスが便利とは言えない。また、十和田湖で観光業を営む方々からも、二次交通不足の問題が指摘されている。

③冬期間の休業

十和田湖では青森県側も含め、冬期間は大きな宿泊施設が数軒しか営業していない。町の中心部でも康楽館で興業が行われなかったり、茶屋が営業していなかったりという状況であるが、台湾人をはじめ、東南アジアからの訪日客は雪にあこがれをもっていることから、閑散期である冬期間においては雪を素材とした外国人観光客の誘致が求められる。

④観光関連団体間での連携が不十分

ヒアリング調査から、小坂町に従事している事業者間での連携・協力体制がとれていないことが明らかになった。情報発信は個々の団体がそれぞれ行っていて、一括管理がなされておらず、十和田湖においては青森県側との情報共有も希薄である。町を越えた、県を越えた連携・協力が必要とされるため、官民一体となって積極的に調整していかなければならない。

⑤観光業従事者の高齢化

小坂町の観光事業者の高齢化が進んでおり、観光資源の管理なども大変になってきている。かつての活気を取り戻すためには若者の力が必要であり、若者の雇用を広げていかなければならない。

⑥十和田湖への観光客離れが進む

かつては一大観光地であった十和田湖も、東日本大震災や鳥インフルエンザの影響、激化する地域間競争の中での観光客離れが進み、かき入れ時の夏休み期間でも閑散としている。そのため、近年では宿泊施設の閉鎖も相次ぎ、残された建物の撤去が問題として残っている。また、十和田湖の観光客数減少は小坂町の中心部エリアにも影響を与えており、十和田湖への通り道に位置する道の駅でも大きな打撃を受けている。



休屋

小坂町の観光を盛り上げていくためには、青森県側も含めた十和田湖の再生が重要な課題である。

⑦団体旅行・教育旅行の減少

観光客の個人化、少人数化が全国的な傾向として進んでいる反面、団体旅行は減少している。小坂町においても例外ではなく、十和田湖や小坂町の中心部から十和田湖エリアへの行き来の途中で立ち寄られる道の駅をはじめ、町中心部の主要観光施設においても団体客離れが進んでいる。また、平成28年3月に開業した北海道新幹線の影響により、これまで道南方面から訪れていた中学校の修学旅行の学校数が減少に転じている。修学旅行で訪れる学校数の減少は一時的なものか今後注意深く見守っていく必要はあるが、修学旅行の誘致に向けた新たな魅力の提供など、何らかの対策を考えていかなければならない。

⑧観光客誘致に対する環境が不十分

小坂町には十和田湖を上から眺望できる展望台があるが、伸びすぎた木が眺望を阻害している。展望台以外の場所においても、このように木の生長によって美しい眺望が望めなくなっているが、観光客誘致のためには十和田湖の眺望は欠かせないため、自然保護とのバランスをとりつつ、観光資源を最大限に活かせるように、関係機関との調整により十和田湖眺望の改善が必要である。また、小坂町には2軒しかコンビニがないが、最近では宿泊施設を選ぶ条件としてコンビニが近くにあることを重要視している人もおり、コンビニの有無は観光にとって重要な問題である。都会の日常とはかけ離れた非日常を味わえるとポジティブにとらえることもできるが、十和田湖周辺の観光事業者側からもコン

ビニやスーパーが近くに無いことが不満として挙げられているため、対応が必要である。

⑨通過型の観光地で宿泊客が少ない

小坂町は盛岡～弘前の間に位置すること、平成 25 年に大館北～小坂町間で自動車専用道路が開通したことにより、通過型の観光地になってしまっている。また主要な観光資源にだけ人が集まり、地元の飲食店や商店などにまで観光客が足を運んでいない。小坂町内の回遊性を高め、通過型から滞在型の観光地へと移行できるような工夫が求められる。

⑩特産物・特産品のアピール不足

“強み”の⑦で挙げたように小坂町には地域独特の食文化がある。小坂町を代表する物産としては、小坂町に群生するアカシアの花から採取したアカシアハチミツや、小坂町のブドウ畑で栽培されたブドウを原材料にしたブドウジュースなど小坂町の素材に拘ったものが多々あるが、その全国的な知名度は高いとは言えない。小坂町ブランドの全国的な PR や魅力的な素材を活かした新たな商品の開発などを行っていく必要がある。



アカシアハチミツ

⑪野生動物などの被害による風評

十和田湖周辺の森では熊が出没しており、熊への注意を呼びかける看板も設置されている。遊歩道でも熊の目撃情報もあり、観光に打撃を与えている。人々が安心して観光を楽しむために対策を練らなければならない。

<小坂町の“機会”>

①観光客の個人化・少人数化

かつて観光旅行への参加形態は、旅行会社主催の団体旅行が主体であったが、インターネットの普及などにより、旅行の情報収集や手配が容易になったことから、観光旅行の形態が個人化・少人数化してきている。その結果、旅行先として選択される機会が拡大する。

②観光ニーズの多様化・成熟化

人々の価値観が様々に変化する中、観光に対するニーズが多様化し、市場が成熟化してきており、地域文化の体験を求める本物志向の旅行者が増大してきていることも、旅行先として選択される機会の拡大につながる。

③訪日外国人旅行者の急増

平成 28 年度の訪日外国人旅行者数は対前年 21.8%増の 2,404 万人と急増している。特

に、東アジアの旅行者を中心にリピーターが増加する中、新たな旅行目的地が求められてきていることから、外国人旅行者が様々な地域に訪れる機会が拡大している。

④国立公園ブランド化のモデルに選定

十和田八幡平国立公園が環境省の国立公園満喫プロジェクトに選定された。このプロジェクトでは訪日外国人をひきつける取り組みを計画的、集中的に実施することを掲げており、十和田湖の観光再生に向けて小坂町の観光事業者からの期待も大きい。

⑤DMO 組織である秋田犬ツーリズムの設立



秋田犬

平成 28 年の 4 月に大館市と北秋田市とともに一般社団法人秋田犬ツーリズムが DMO 組織として設立された。世界的にも知名度の高い秋田犬をシンボルとして、各観光資源をアピールする。他地域との連携が強化されるとともに、インバウンド数の増加にも積極的に取り組む構えが示されており、今後の展開への期待は大きい。

⑥北海道新幹線の開業

平成 28 年 3 月に北海道新幹線が開業した。北海道から青森、盛岡への移動が容易になったことで、小坂町への北海道からの観光客の増加が見込まれることから、北海道、特に道南地域からの観光客の誘致を図るとともに、北海道新幹線を利用して北海道に向かう観光客にも立ち寄ってもらえるような仕組みづくりが求められる。また、インバウンドに目を向けると、函館空港 in、仙台空港 out の訪日する台湾人観光が存在するため、こういった外国人観光客も呼び寄せてくることが求められる。

⑦ミシュラン・グリーンガイドでの評価

十和田八幡平国立公園、十和田湖、奥入瀬渓流は「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」に掲載されている。海外では、旅行のバイブルとしても利用されているミシュラン・グリーンガイドに掲載されることは、旅行先として選択される機会の拡大につながる。これまでも掲載された資源や施設が人気の観光地になっている例が多数存在する。

<小坂町の“脅威”>

①本格的な人口減少社会の到来

我が国の人口は平成 22 年をピークに減少しており、約 30 年後の平成 57 年には 1 億人程度までに減少すると予想されている。この人口の減少により、今後は 1 人当たりの旅行回数が増加しない限り、国内旅行者数も減少することとなる。

②国内観光需要の地域間競争の激化

少子高齢化、人口減少による地域経済の疲弊に対して、交流人口の拡大により地域経済の活性化を目指す地域が増大しており、これまで観光に対して熱心でなかった地域においても観光振興に取り組んできており、限られた旅行需要の争奪戦が激化している。

③訪日外国人観光客の誘致の全国的取り組み

平成 15 年に訪日外国人旅行者の増大を目的に開始されたビジット・ジャパン・キャンペーンにより、訪日外国人旅行者の誘致に向けた取り組みを展開する自治体が増加している。また、先細りが懸念される国内需要の減少を補うために、訪日外国人旅行者の誘致に取り組む自治体がますます増加するものと予想され、外国人旅行者の争奪戦も激化している。

④DMO 設立団体の増加

日本版 DMO とは観光関連団体のまとめ役であり、地域のマーケティングやマネジメントを行う法人のことである。近年日本全体で DMO が注目されており、DMO 設立団体も増加している。平成 29 年 1 月 20 日現在では、123 の団体が日本版 DMO 候補法人として登録されている。

⑤十和田湖以外に 7 国立公園がモデル事業に選定

国立公園満喫プロジェクトでは、十和田八幡平国立公園の他に、阿寒国立公園、日光国立公園など七つの国立公園が選定されている。これらの地域においては今後、利用環境やプログラムの整備が集中的に行われていく予定である。

⑥北海道新幹線の開業

北海道新幹線の開業は“機会”である反面“脅威”でもある。康楽館では、新幹線の開業により北海道の学校が岩手以遠に訪れることができるようになったため、北海道からの修学旅行生が例年から約 3 割も減少している。岩手以遠の地域に負けない魅力の提供を行い、北海道からの修学旅行生の流出を防がなければならない。

(2) 小坂町観光の問題点・課題

①小坂町の観光資源

小坂町は鉱山文化の象徴であり、国の重要文化財の指定や近代化産業遺産の認定を受けた「康楽館」や「小坂鉱山事務所」を中心に、地域の歴史・文化を観光資源として活用している。

②十和田湖に対する取り組み

団体旅行から個人旅行への移行や、平成 23 年 3 月に発生した東日本大震災等の影響から十和田湖への観光客が減少傾向にある中、官民連携による十和田湖西湖畔整備・誘客促進協議会の活動や、十和田市との連携による十和田湖畔温泉利活用、十和田湖活性化会議に取り組んでいる。

③秋田県や青森県、十和田市と連携した取り組み

震災後低迷している十和田湖観光資源の磨き上げを、秋田県、青森県、十和田市と協力して進めるとともに、十和田湖西湖畔・整備誘客推進協議会と連携しながら、明治百年通りと十和田湖をつなぐ一体的な観光振興を図っていく必要がある。

④産業観光に対する取り組み

小坂町の環境リサイクル産業やエコタウンとしての環境への取り組みや、資源循環型農業などが観光資源として注目されるなか、平成 26 年 10 月に開催した全国産業観光フォーラムをきっかけとして、自然や鉱山文化、産業や環境といった多様な観光資源と連携した観光産業への取り組みが求められる。

⑤国内外からの交流人口の拡大

少子高齢化、人口減少社会を迎えた我が国において、外国人観光客を含め、国内外からの交流人口のさらなる拡大を図るため、Wi-Fi をはじめとする通信環境の整備や、多言語による表示などの整備が求められる。

特に、今後さらに拡大が予想されている外国人観光客のうち、東北地域の訪れる外国人観光客数は全体の 2 %程度にとどまっていることから、東北地域が一体となって外国人観光客を誘致することが緊急の課題となる。

H24年			H25年			H26年			H27年		
運輸局等	伸び率	順位	運輸局等	伸び率	順位	運輸局等	伸び率	順位	運輸局等	伸び率	順位
東北運輸局	61.6	1	沖縄総合事務局	55.3	1	四国運輸局	61.8	1	沖縄総合事務局	91.0	1
北陸信越運輸局	54.1	2	四国運輸局	48.2	2	中部運輸局	57.6	2	近畿運輸局	64.9	2
北海道運輸局	51.5	3	九州運輸局	45.1	3	沖縄総合事務局	56.5	3	北陸信越運輸局	61.3	3
中部運輸局	46.0	4	北陸信越運輸局	31.6	4	中国運輸局	45.1	4	九州運輸局	58.6	4
沖縄総合事務局	36.0	5	近畿運輸局	26.4	5	近畿運輸局	38.8	5	北海道運輸局	52.8	5
関東運輸局	34.9	6	北海道運輸局	24.9	6	関東運輸局	38.0	6	中部運輸局	49.1	6
近畿運輸局	29.9	7	中国運輸局	23.1	7	北陸信越運輸局	35.3	7	関東運輸局	48.2	7
中国運輸局	26.3	8	関東運輸局	12.6	8	北海道運輸局	28.9	8	中国運輸局	43.9	8
九州運輸局	22.8	9	中部運輸局	7.3	9	東北運輸局	26.4	9	四国運輸局	34.9	9
四国運輸局	6.0	10	東北運輸局	2.4	10	九州運輸局	4.0	10	東北運輸局	19.1	10
H24年			H25年			H26年			H27年		
都道府県	伸び率	順位	都道府県	伸び率	順位	都道府県	伸び率	順位	都道府県	伸び率	順位
山形県	84.5	1	山形県	58.7	1	青森県	57.0	1	福島県	47.1	1
福島県	63.8	2	岩手県	15.4	2	秋田県	47.3	2	青森県	17.7	2
秋田県	61.3	3	青森県	5.1	3	宮城県	35.9	3	宮城県	17.7	2
宮城県	54.5	4	宮城県	2.7	4	福島県	27.5	4	岩手県	-1.9	4
青森県	51.4	5	秋田県	-0.1	5	岩手県	25.7	5	秋田県	-1.9	4
岩手県	35.3	6	福島県	-5.4	6	山形県	5.9	6	山形県	-1.9	4

出典：観光庁「宿泊旅行統計調査」

⑥広域連携による取り組み

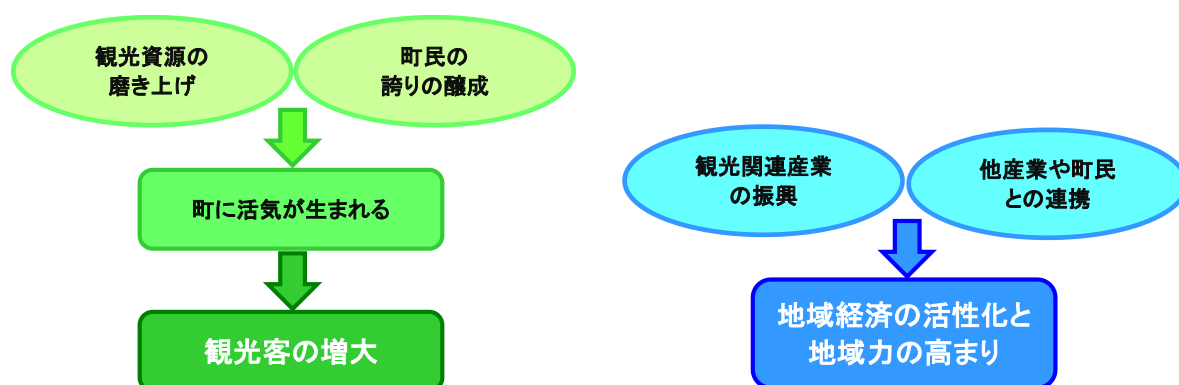
観光による誘客は、小坂町単独での取り組みでは限りがあるため、広域による観光拠点としての魅力と併せ、小坂町への誘導を図る必要がある。そのためには平成 28 年 3 月に開業した北海道新幹線なども視野に入れながら、広域連携による観光の推進が求められる。

8. 小坂町観光振興計画の基本的な方向性

(1) 小坂町観光の目指すべき姿

小坂町の観光の目指すべき姿については、第5次小坂町総合計画（後期基本計画 H28→H32）の基本目標3「個性をみがき“躍動”するまち」の施策3-2「多くの人が訪れる魅力ある観光のまち」において、以下の3点がめざす姿として掲げられている。

- ・本町の観光資源を磨き上げ、滞留型観光の町としてのイメージを形成し、にぎわいの創出を図るとともに、産業観光や特産品などの情報を発信する。
- ・町全体で観光客をおもてなしする機運を醸成し、また訪れたい地域としての新たな価値を“ともに創りあげる”観光づくりを進める。
- ・町内の観光施設や設備の充実を図るとともに、グリーンツーリズムなど、農村部の機能や地域の特性を活かした交流の推進を図り、「日本で最も美しい村」として地域の活性化と自立を推進する。



＜小坂町観光の基本方針（コンセプト）＞

小坂町の観光を推進していく上で、具体的な事業展開を行う際には、関係者等が共通の目的をもち一丸となって事業を進めていくことが重要である。多くの観光地では、「観光は一部の観光事業者のためだけのもの」といった誤解も生まれているが、実際には農業や漁業、商工関係者、交通事業者、さらには町民までが関わりを持っている。そのため、多くの町民や事業者が、それぞれ立場で観光に関わるためには、観光振興の共通の方針（コンセプト）を設定して、わかりやすい言葉で小坂町の観光に対する理解と協働を求めることが重要である。

特に、観光振興の施策実施のためには町民が小坂町の魅力・観光資源を理解し、観光振興に関わってもらうため、観光関係者等と町民が協働しながら進めていく体制づくりが求められている。

そこで、小坂町の観光振興の基本方針（コンセプト）を次のように設定する。

十和田湖と環境・産業観光による小坂町の観光振興

(2) 観光振興に対する基本施策

また、小坂町の第5次総合計画では、このめざす姿を具現化していくための施策として、以下の8点が掲げられている。

- (1) 観光基盤の整備
- (2) 近代化産業遺産の活用
- (3) 情報発信と受入体制の整備
- (4) 滞留型観光の推進
- (5) 広域観光の推進
- (6) 観光と産業との連携
- (7) 十和田湖の振興
- (8) おもてなしによる観光の推進

(3) 観光振興に対する展開方策

今回策定する小坂町観光振興計画では、第5次総合計画に掲げられためざす姿を実現するための主な取り組みについて、具体的な事業内容を検討、提案する。

以下に、主な取り組みの各項目について、事業内容の基本的な方向性を示す。

①観光基盤の整備

【事業展開（案）】

- Wi-Fi 環境の整備・拡充
- 災害発生時の情報発信機能の整備
- 既存観光資源のリノベーション

- ・観光庁が実施する訪日外国人消費動向調査によると、日本滞在中に困ったことの第1位に「Wi-Fi 環境の不備」が上げられるように、外国人観光客の誘致に必要不可欠な Wi-Fi 環境の整備・拡充が求められる。また、多言語による情報発信機能に加え、災害発生時の旅行者向け情報発信機能についても必要である。
- ・また、消費者の観光に対する価値観の多様化により、既存観光資源の提供手法では飽きたらず、新たな価値や魅力の提供（リノベーション）が必要となることから、消費者のニーズを踏まえた、新たな観光素材の提供手法が求められる。

②近代化産業遺産の活用

最重点事業

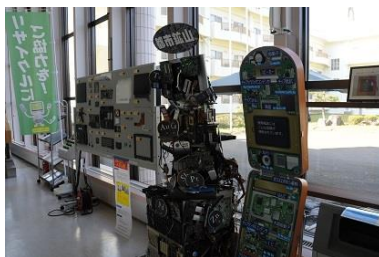
【事業展開（案）】

- 近代化産業遺産などを活用した産業観光の深度化
- 環境をテーマとした産業観光の展開
- 教育旅行や学習観光の誘致

- ・小坂町における近代化産業遺産の活用に関しては、何と言っても鉱山関連の資源や施設を活用した産業観光の展開が求められる。既に、企業の協力を得て産業観光に取り組んでいるが、消費者の知的好奇心を満足させ得るさらに深度化した産業観光の取り組みが必要である。
- ・また、昭和15年に開催が予定されていた東京オリンピックの前に、日本を訪れる外国人旅行者のための宿泊施設として日本政府の要望を受け建設された十和田ホテルも近代化産業遺産に認定されている。建物は外装全体に秋田杉が用いられ、石積み基壇上に半割の丸太を配する独自の手法が見事で、一般消費者を対象にしたインターネットによるニーズ調査でも、同じく近代化産業遺産に認定されている康楽館や小坂鉱山事務所よりも来訪意向が高くなっていることから、十和田ホテルの産業観光的な活用も求められる。
- ・さらには、小坂鉱山の製錬技術から派生した環境リサイクル産業は隣接する大館市のリサイクル産業とともに、この地域の重要な産業であり、環境問題に関心が高まっている時代においては、リサイクル産業も産業観光の存在として非常に魅力的な素材となっている。
- ・このような産業観光への取り組みも強化することで、国内外問わず教育旅行や学習観光の誘致が可能となる。特に、日本の先端技術に関心の高い東南アジアからの教育旅行誘致にとっては、重要なコンテンツとなることから、秋田県や周辺自治体と連携した海外教育旅行の誘致が求められる。



小坂製錬外観



あきたエコタウンセンター



十和田ホテル

③情報発信と受入体制の整備

【事業展開（案）】

- 旅行前・中・後における情報発信
- SNS を活用した情報発信
- ガイド人材の育成とスキルアップ

- ・我が国においては、高度情報化社会の進展により、いつでも、どこでも必要な情報が入手できる社会になっている。このような状況のなか、旅行目的地として選択してもらえるよう、また、旅行中により地域を満足してもらえるよう、さらには、旅行後も再び訪れてもらえるよう、それぞれの段階（旅行前、旅行中、旅行後）における情報提供に関する仕組みの構築が求められる。
- ・外国人の誘致に関しては、行政や観光関連団体が発信する情報も重要だが、外国人はそういった情報を100%信用することではなく、外国人旅行者の生の声（口コミ）を参考にする傾向がますます強くなってきていることから、外国人観光客の誘致に向け SNS などを活用した効果的な情報発信の仕組みが求められる。
- ・観光を目的に訪れた旅行者により満足してもらうには、地域を紹介するガイドの存在が大変重要になる。既に小坂町には小坂鉄道レールパーク、あきたエコタウンセンター、小坂鉱山事務所や中小路の館、郷土館など個々の施設を案内するガイド組織は存在しているものの、それぞれがバラバラで活動していたり、ガイドも不足していることから、町全体を通して案内できる仕組みにはなっていない。
- ・ここ最近は消費者の価値観の多様化により、観光に対するニーズも知的好奇心の高まりから高度化してきており、色々な観光地を足早に見て回る観光から、一つの地域に滞在し、じっくりその地域を味わう観光が求められてきている。
- ・そのため、小坂町全体を過去から現代まで一つの物語（ストーリー）として案内できるガイドの養成や、ガイド自身のスキルアップ、さらには、新たなガイドの育成も重要である。

ガイド養成講座（イメージ）



イメージ1



イメージ2



イメージ3

④滞留型観光の推進

【事業展開（案）】

- 観光魅力の再発見・磨き上げ
- 外国人の視点による観光資源の掘り起こし
- 滞留型観光メニューの造成

- ・町内には康楽館や小坂鉱山事務所、小坂鉄道レールパーク、十和田湖など主要な観光資源がある。しかしながら、消費者の価値観の多様化により、これまで観光資源としては注目されてこなかった地域資源も、観光資源として見直されることが多々あることから、小坂町の新たな観光魅力を再発見し、さらに磨き上げていくことが求められる。
- ・特に、外国人観光客にむけては、地域が売り出したいものが、外国人にとって買いたいものとはならないことが多くあることから、外国人の視点による観光魅力の再発見が必要である。
- ・また、既存の観光資源に観光客のニーズを踏まえ、町内での滞留型観光のメニューづくりが求められる。



- ブルートレイン“あけぼの”宿泊体験
- 鉄道博物館 小坂鉄道レールパーク
- 明治の芝居小屋 康楽館 常打芝居観劇体験
- 鉱山資料館 小坂鉱山事務所
- 環境教育体験 循環型社会の資源リサイクルを学ぶ
- “蜂蜜の女王” 天然アカシアはちみつ
- “鵲（ときと）奇跡の山ぶどう” 収穫作業体験
- 日本史上最大規模の噴火の軌跡 十和田湖深発見体験
- 小坂町で食べる体験

⑤広域観光の推進

【事業展開（案）】

- テーマ連携による広域観光の推進
- 北海道新幹線開業による南北海道との連携

- ・小坂町の観光振興に関しては、小坂町単独で展開しても限界がある。また、観光客は市町村境など関係なく、自らの目的が満たされるであろう地域に訪れる。そのため、町単独ではなく周辺地域と連携し、観光の魅力を補強・補完し合うなど広域的な観光の取り組みが必要である。
- ・特に、環境リサイクル関連での大館市や、鉱山関連での鹿角市と十和田湖関連での十和田市などとの広域連携や、秋田犬ツーリズム、津軽地域観光団体事務局連絡会議での取り組みの強化を図っていくことが求められる。
- ・また、平成 28 年春に東北新幹線が新函館北斗駅（北海道新幹線）まで延伸されたことから、更に広域観光の可能性も広がっており、外国人観光客の誘致も踏まえた南北海道との広域観光の可能性についても検討する。

⑥観光と産業との連携

【事業展開（案）】

- 農業や飲食業など他産業との連携
- 新たな産業創造

- ・前述したように、消費者の観光に対するニーズが多様化してきていることで、これまで観光資源として注目されてこなかった地域資源が観光資源として見直されるようになっている。
- ・特に、近年、地域の歴史的・文化的価値のある産業文化財、生産現場、及び産業製品を観光資源とし、それらを通じてものづくりの心に触れるとともに、人的交流を促進する観光活動としての産業観光が注目されている。このような状況のなか、先進的な取り組みが行われている小坂町において、さらにその可能性を高めるため、他産業との連携による新たな産業観光の展開が求められる。
- ・さらに、観光関連産業ばかりでなく、農業や漁業をはじめとする町内の様々な事業者の観光に対する意義や効果に対する意識を高めることなどにより、着地型観光の推進も必要である。

⑦十和田湖の振興

最重点事業

【事業展開（案）】

- 十和田湖畔（和井内エリア）の拠点整備
- 体験型の観光プログラムの整備
- 湖畔を歩ける遊歩道や白地山登山道など回遊機能の整備
- 十和田湖を眺望できる展望台の環境改善

- ・十和田湖の小坂町側玄関口でもある和井内エリアは、和井内夫婦が鉱山労働者をはじめとした地域住民の食料確保を目的に、私財を投げ打って養魚事業に取り組んだ功績を称えたことでその地名にもなった。ここを十和田湖観光の拠点とし、市街地との周遊促進を図ることのできる施設整備が求められている。
- ・具体的には、現存するヒメマスふ化場の見学や、十和田湖ひめますの加工体験、和井内貞行の功績に関する資料展示のほか、飲食・物販機能や情報発信機能など、十和田湖観光において必要な機能などが求められる。
- ・また、近年は健康志向の高まりから歩くことに対する需要が高まっているため、現存する十和田湖の遊歩道や白地山登山道を含め、十和田湖関連の遊歩道の拡充を図る。また、遊歩道による回遊性を高めるためには、地域の歴史的事象や自然などを案内するガイドとともに巡るツアーなどの造成も求められる。
- ・宿泊観光旅行先の行動に関して「自然の風景や季節の花見を楽しむ」は、「温泉を楽しむ」「食を楽しむ」に次ぐ人気の行動^(注1)となっている。また、一般消費者を対象にしたインターネットによるニーズ調査において十和田湖に対する来訪意向が最も高くなっている。もちろん十和田湖畔や遊覧船からでも十和田湖を堪能することができるが、十和田湖を一望できる展望台の役割も大変重要である。小坂町側にも十和田湖を眺望できる展望台がいくつか整備されているものの、樹木の生長などにより眺望が阻害されている展望台もあることから、早急に展望台からの眺望を改善する必要がある。

(注1) 日本観光振興協会 観光の実態と志向

⑧おもてなしによる観光の推進

【事業展開（案）】

- 町民の観光に対する意識の高揚
- 観光客をもてなす町民活動グループの拡充
- 快適な滞在空間の提供

- ・旅行の満足度は、訪れた観光施設や食事、宿泊施設、街の雰囲気などによって大きく左右されるが、訪問先で接した地元の方々の印象も大きく影響する。
- ・直接観光客と接する観光関連施設の方々はもちろん、町民も含め、町全体で観光客を温かく迎えるといった意識を高めていくことが求められる。
- ・また、訪日外国人においては、喜ばれるおもてなしや受け入れることができないおもてなしが、国や地域によって様々なので、そういった点を理解することも大変重要である。
- ・なお、人的な意識を高めていくことだけでなく、「①観光基盤の整備」にも通じる点であるが、街中のトイレを清潔にする、ゴミの散乱を無くす、さらには明治百年通りのように街路を花で飾るなど、既に取り組まれていることに一層力を入れ、観光客が滞在中気持ちよく過ごすことができる空間を提供することもおもてなしの重要な視点となる。

(4) 小坂町観光振興計画の体系

SWOT分析
(小坂町観光の
問題点・課題)

目指すべき
姿

小坂町観光の現状

・ ・ ・
小坂町に
対する
イメージ・
ニーズ
調査
(既存資料・
アンケート
調査)

地域	強み (Strength)	弱み (Weakness)
	・地域の観光資源の強みは何か ・他に考えられる強みは何か	・地域の弱みは何か ・他に考えられる弱みは何か
地域	① 旧鉱山の町としての歴史、文化	① 小坂町に対する認知度が低い
	② 日本の近代化に貢献した「産業遺産」	② 小坂町へのアクセスが不便
	③ 明治の芝居小屋「康楽館」	③ 冬期間の休業
	④ 美しい自然環境	④ 観光関連団体間での連携が不十分
	⑤ 日本を代表する観光資源「十和田湖」	⑤ 観光業従事者の高齢化
	⑥ 宿泊施設としての「フルートレインあけぼの」	⑥ 十和田湖への観光客離れが進む
	⑦ 魅力ある食べ物	⑦ 団体旅行・教育旅行の減少
	⑧ 環境に対する精神	⑧ 観光客誘致に対する環境が不十分
		⑨ 通過型の観光地で宿泊客が少ない
		⑩ 特産物・特産品のアピール不足
		⑪ 野生動物などの被害に対する風評
市場環境	機会 (Opportunity)	脅威 (Threat)
	・市場変化の機会はないか ・他に考えられる機会は何か	・競争相手の反撃の脅威は何か ・類似参入の脅威はあるか
	① 観光客の個人化・少人数化	① 本格的な人口減少社会の到来
	② 観光ニーズの多様化・成熟化	② 国内観光需要の地域間競争の激化
	③ 訪日外国人旅行者の急増	③ 訪日外国人観光客誘致の全国的取り組み
	④ 国立公園ブランド化のモデルに選定	④ DMO設立団体の増加
	⑤ DMO組織である秋田犬ツーリズムの設立	⑤ 十和田湖以外に7国立公園がモデル事業に選定
	⑥ 北海道新幹線の開業	⑥ 北海道新幹線の開業
	⑦ ミシュラン・グリーンガイドでの評価	

・ ・ ・
農村部の
機能や
地域の
特性を
活かした
交流の
推進を
図り、
新たな
価値を
創り
上げる
を
推進
する

基本方針
(コンセプト)

観光振興に対する基本施策

観光振興に対する展開方策
(23の提案)

十和田湖と環境・産業観光による小坂町の観光振興

①観光基盤の整備

- Wi-Fi環境の整備・拡充
- 災害発生時の情報発信機能の整備
- 既存観光資源のリノベーション

最重点事業

②近代化産業遺産の活用

- 近代化産業遺産等を活用した産業観光の深度化
- 環境をテーマとした産業観光の展開
- 教育旅行や学習観光の誘致

③情報発信と受入体制の整備

- 旅行前・中・後における情報発信
- SNSを活用した情報発信
- ガイド人材の育成とスキルアップ

④滞留型観光の推進

- 観光魅力の再発見・磨き上げ
- 外国人の視点による観光資源の掘り起こし
- 滞留型観光メニューの造成

⑤広域観光の推進

- テーマ連携による広域観光の推進
- 北海道新幹線開業による南北海道との連携

⑥観光と産業との連携

- 農業や飲食業など他産業との連携
- 新たな産業創造

最重点事業

⑦十和田湖の振興

- 十和田湖湖畔(和井内エリア)の拠点整備
- 体験型の観光プログラムの整備
- 湖畔を歩ける遊歩道や白地山登山道など回遊機能の整備
- 十和田湖を眺望できる展望台の環境改善

⑧おもてなしによる観光の推進

- 町民の観光に対する意識の高揚
- 観光客をもてなす町民活動グループの拡充
- 快適な滞在空間の提供

9. 最重点事業

(1) 近代化産業遺産の活用

<小坂鉱山の歴史>

小坂町は鹿角地方と津軽地方を結ぶ津軽街道沿いにあり、国境付近に接し鹿角平野の北端に位置していることから軍事的にも重要視された地域である。鎌倉時代に入ると鹿角四氏に数えられた秋元氏により小坂館が築かれ、一族である小坂氏が代々当地を支配した。戦国時代には三戸南部家の侵攻により秋元氏は没落し当地は南部領となり、江戸時代も盛岡藩に組み込まれた。

文久元年（1861年）に小坂鉱山が発見されると、盛岡藩直営の鉱山として大規模な開発が行われ多くの銀等が産出されるようになった。明治維新後に盛岡藩が廃藩になると工部省（官営）から藤田組に払い下げられ近代的な鉱山として整備され、町としても最盛期は秋田市に次いで県内2番目の人口を誇り、様々な面で近代化が進められた。

現在は、同和鉱業株式会社小坂鉱業所（現 DOWA ホールディングス株式会社）の採鉱部門が消滅し、小坂製錬株式会社として稼働している。そのため小坂町内の随所に鉱山関係の施設・遺跡を見ることができる。

<近代化産業遺産の保存状況>

小坂製錬事務所の北東約1.5kmには旧元山鉱床の露天掘り跡、内ノ岱と上向地区には採鉱関係の諸施設跡がある。また小坂製錬所の敷地内には、旧元山浄水場濾過（ろか）室（明治35年）、旧鑄造（ちゅうぞう）仕上場（明治37年）、旧延銅場（明治38年）や旧電錬場（明治42年）など全国にまれに見るほど多くの産業遺産が残され現役で稼働している。標高276mの高地には山神社が祀られており、境内にある御手洗・石灯籠などの石碑に刻まれている文字は、鉱山史を解く鍵ともなっている。山神社から眺望されるカラミの山も貴重な鉱山遺産である。

康楽館通りと呼ばれていた明治百年通りはアカシア並木に彩られ、小坂鉱山の関連施設であった、康楽館、天使館、小坂鉱山事務所等が建ち並び、以前は定期市も開かれていた。近くには明治42年に開業した小坂鉄道があり、藤田組の技術陣の努力によって運行していた。現在は小坂鉄道レールパークとして再生されている。大谷地には選鉱所跡があり、曹源院と墓地がある。墓石から友子制度の存在を知ることができる。古館地区にある農場は、煙害対策のため各種植物・作物の試験栽培が行われるなど、貴重な資料が保存されている。

米代川水系大湯川沿いには、上流から銚子・止滝・大楽前・沼平・扇平・大湯の6カ所の発電所がある。銚子発電所は明治30年に運転開始された。いずれの発電所も現在稼

働しているが、その周辺にも鉱業遺跡が残存している。小坂鉱山は歴史の古い大規模稼行鉱山であり、鉱山周辺には数多くの遺跡がみられる。

＜鉱山技術の歴史・人物＞

また、鉱山技術と歴史の中には優れた人物の存在がある。後に近代製鉄の父と呼ばれた大島高任や、お雇い外国人技師として日本鉱業界をリードしたクルト・アドルフ・ネットーらに支えられ、明治初期の「富国強兵」「殖産興業」政策に大きく貢献した。明治 17 年（1884 年）に払い下げを受けた藤田組は主要鉱山の地位を確立した。明治 30 年代には、土鉱と呼ばれた鉱石が底をつき沈滞期を迎えていた小坂鉱山に「黒鉱自溶製錬」の技術が成功し新たな活気をもたらした。このように、起死回生に携わった技術者たちの歴史やその後の日本鉱業界に大きな影響を及ぼした歴史などを垣間見ることができる。

近年は、鉱山の産出量や産出金額が下がることで閉山されてしまったが、リサイクル産業で新たな展開を見せている。

＜近代化産業遺産活用の意義＞

小坂町の近代化産業遺産群は、小坂町や日本にとって極めて貴重な資源であると同時に地域の重要な観光資源でもある。これらの地域資源をさらに活用することによって、小坂町ならではの観光魅力を創出できる。

小坂町ではすでに多くの遺産活用が進んでいるが、今後とも更なる物語性（ストーリー）に幅広いバリエーションをつけるなど、様々な角度からスポットをあてた産業観光を構築し、産業観光を深化させる活動を継続的に進めていく必要がある。

そこで、最重点事業として以下に具体的な展開方法を示す。

【事業展開】

- 近代化産業遺産などを活用した産業観光の深化
- 環境をテーマとした産業観光の展開
- 教育旅行や学習観光の誘致

◆近代化産業遺産などを活用した産業観光の深化

小坂鉱山事務所や康楽館、小坂鉄道レールパークなどすでに多くの近代化産業遺産が活用されているが、前述のように町内にはまだまだ数多くの遺産や遺跡が残されている。これら遺産を発見・発掘する作業を継続的に進め、遺産の歴史性や価値の再検証を行い、新たな観光資源として磨き上げる作業が必要である。遺産については所有関係や保存状態など、様々な障壁が存在しており、これらを一つ一つクリアしていく地道な努力が必要である。鉱山関連の遺産や資源をさらに活用した幅の広い産業観光の展開が求められる。消費者の知的好奇心をさらに満足させ、いつまでも飽きさせない産業観光を目指すためには、これまでの活動をさらに深化させた産業観光への取り組みが必要となっている。

例えば、1940（昭和 15）年に開催が予定されていた東京オリンピックの前に、日本に訪れる外国人旅行者のための宿泊施設として日本政府の要望を受け建設された十和田ホテルも近代化産業遺産に認定されている。建物は外装全体に秋田杉が用いられ、石積み基壇上に半割の丸太を配する独自の手法が見事で、一般消費者を対象にしたインターネットによるニーズ調査でも、同じく近代化産業遺産に認定されている康楽館や小坂鉱山事務所よりも来訪意向が高くなっていることから、十和田ホテルの産業観光的な活用も求められる。

具体的には、十和田ホテルの産業観光ツアーの開催が考えられる。小坂町の鉱山の歴史と連携したプログラムを作成するなど、小坂町から十和田湖までのエリアの広い産業観光も魅力的である。



十和田ホテル外観

十和田ホテル内観



また、鉱山には欠かせない電力に関する歴史を理解してもらうため、米代川水系大湯川沿いの銚子・止滝・大楽前・沼平・扇平・大湯の 6 カ所の発電所を巡る産業観光ツアーを作るなど、行政や企業の協力はもとより町全体で観光に取り組む必要がある。

鉱山においては、鉱物から様々な金属等を取り出す製錬が必要であり、これらの過程に付随する形で機械工場、車両整備工場、化学工場、発電所、変電所、ポンプ場、廃水処理場、貨物鉄道などが設置される。これらは鉱山の主要事業を円滑に進めるために必要であり、鉱山付随設備等を見学・学習することで、鉱山事業を深く知ることができる。

これらの資源により、町の産業構造を製造業から観光産業へと転換していくための一つの契機とするためには、町にとって産業観光はもっとも有力なコンテンツ（項目）である。産業観光をさらに磨き上げるための継続的な努力が必要であり、立ち止まった途端に後退する道を歩み始めてしまうものであることを忘れてはならない。



銚子発電所



止滝発電所



新大楽前発電所



扇平発電所



大湯発電所

◆環境をテーマとした産業観光の展開

前述のように、小坂鉱山の製錬技術は現代の環境リサイクル技術に多く使われている。小坂町に限らず秋田県の北部地域は、国のエコタウンにも認定された地域である。

この地域は、かつて世界有数の鉱山地域で、ここで採掘されていた黒鉱と呼ばれる複雑硫化鉱の処理技術については世界のトップクラスで、これらの技術を確認させた鉱山や製錬所を活用した金属リサイクルの事業化を進めていた。

また秋田杉の産地として木材産業も盛んな他、農業においても沿岸部は秋田県有数の野菜産地となっていて、これらの産業から出る廃棄物の処理についても各方面で検討されていた。

このような背景の中で、米代川流域を構成する9の市町村が、お互いに連携を深めながら廃棄物対策に取り組み、資源循環型産業への転換を図り、豊かな自然環境と調和したまちづくりを目指して、エコタウンの計画づくりを進めている。

特に小坂町と大館市では、小坂鉱山から始まった鉱山技術をリサイクル産業に応用し、様々なリサイクル産業が立地している。地球環境問題に関心が高まっている昨今においては、このリサイクル産業も産業観光の柱として非常に魅力的な素材である。

現在でも小坂町にある「あきたエコタウンセンター」を拠点として、小坂町・大館市の産業観光を実施しており、ボランティアガイドによるきめ細かな対応がなされている。この環境産業と産業観光を連携させて、それぞれがバラバラにガイドを行うのではなく、小坂町の観光案内として統合させ「産業観光＋環境リサイクル産業」という視点から案内ができるよう、ガイドスキルの幅を広げるための研修が必要となっており、ボランティアガイドが連携して横断的な取り組みを行うことが求められている。



あきたエコタウンセンターでの解説



エコリサイクル秋田の案内人による
見学風景

◆教育旅行や学習観光の誘致

現在、温暖化や自然破壊など地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然環境を守り、私たちの子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく持続可能な社会を構築することが大切である。

そのためには、国民が様々な機会を通じて環境問題について学習し、自主的・積極的に環境保全活動に取り組んでいくことが重要であり、特に 21 世紀を担う子どもたちへの環境教育はとても重要な意義を有している。

この意味において、小坂町における環境リサイクル産業を学ぶことは極めて有意義であり、国内のみならず世界中の子どもたちが学ぶべきテーマでもある。小坂町の環境リサイクル産業や産業観光への取り組みをさらに強化することによって、国内外の教育旅行を誘致し、子どもたちの学習観光のテーマとして最も適したものになると考えられる。特に日本の先端技術に関心の高い東南アジアからの教育旅行にとっては、日本の重要なコンテンツとなることから、秋田県や周辺自治体とも連携した海外教育旅行誘致が求められる。

具体的には、秋田県や周辺自治体と連携し、東南アジア向けに教育旅行を誘致するため、組織的なプロモーションを行う必要がある。先に地域連携DMOとして設立した秋田犬ツーリズムなどによって、海外プロモーションを行うなど、ターゲット国を明確にしてそれぞれの国ごとのプロモーションを行うことが必要である。また、教育委員会等と連携しながら個々の国ごとの学校単位での誘致活動を展開する必要もある。

一方で、現在のあきたエコタウンセンターの仕組みでは十分な案内と魅力（体験プログラムなど）が不足しており、教育旅行向けの受け入れ態勢整備が必要である。子ども向けのパンフレットや案内システムを作るなど、早急な対策が求められる。



訪日教育旅行のイメージ 1



訪日教育旅行のイメージ 2

(2) 十和田湖の振興

◆整備構想の背景・必要性

□背景

十和田湖畔の和井内エリアは秋田県小坂町にあり、小坂町観光にとって十和田湖からの玄関口となっており、重要な拠点となり得る立地条件を有している。現時点での和井内エリアには、小坂町の十和田湖観光案内所、十和田湖ふ化場、公衆トイレ（環境省）、ロータリー等の施設が立地している。しかし、観光案内所施設の老朽化、土産物店の閉鎖、和井内ホテルの解体など周辺環境の未整備のため、周辺の美しい自然景観との調和が損なわれている。

さらに、観光拠点としての好立地を活かしきれておらず、観光案内機能の充実はもとより、十和田湖観光の拠点や小坂町観光の入口機能、観光客の休憩・十和田湖土産の物販・飲食機能、体験型観光の拠点として、大いに活用できるエリアであると考えられる。

また、和井内エリアはその名にあるように、十和田湖で養魚事業を成功させた地域の偉人、和井内貞行からその名が付けられたと言われており、十和田湖の観光にも大きな影響を与えた人物の歴史がある。和井内貞行は十和田湖の養魚事業の開発の先駆者であるのと同時に観光開発の先駆者でもあったのである。そのドラマチックな人生と夫婦愛から、のちに、十和田湖大川岱に建立された勝漁神社に妻と共に祀られ、和井内神社と改名され現在に至る。

□必要性

このように和井内エリアは、地域ブランド“十和田湖ひめます”の生みの親、和井内貞行に関する歴史性と文化を有したエリアであり、小坂町における十和田湖観光の拠点として、地域性と観光機能を融合した新たな整備構想が必要となっている。本整備構想では、小坂町から十和田湖へ、十和田湖から小坂町への出入口となる和井内エリアにおいて、小坂町のゲートウェイ（玄関口）とも言える観光拠点を整備する。具体的には、以下の機能を整備するとともに、自動車で巡る観光客への対応、さらには“十和田湖ひめます”の認知度向上を図り、小坂町の康楽館や小坂鉱山事務所等、明治百年通りへの誘客による町内回遊型の観光ルート化を促進する。

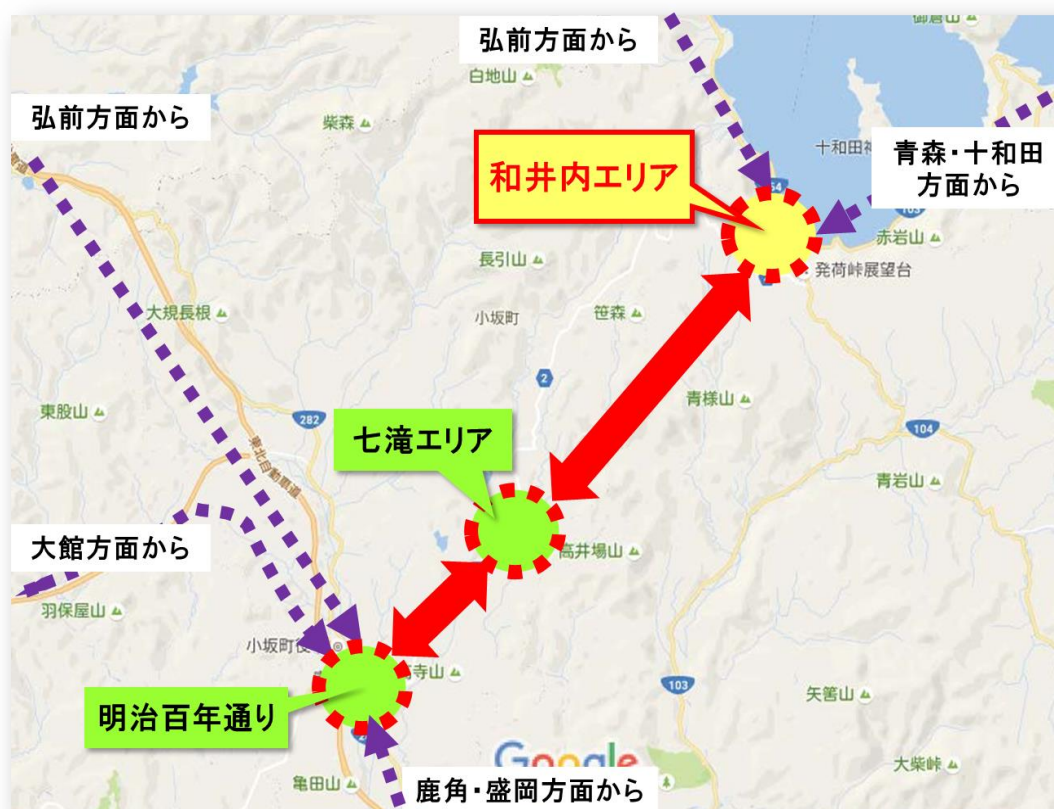
◆整備構想の目的

□目的

小坂町にある十和田湖観光の拠点として有望な和井内エリアについて、観光拠点としての施設の充実を図る。さらには広域での回遊性を高めることによって、小坂町中心街への誘導を促進するため、既存施設の見直しと合わせて必要となる機能の充実を図る。

また、すでに地域ブランドに認定されている“十和田湖ひめます”に関して、ブランドイメージを活用した食や土産品の開発・販売拠点を整備する。さらに、“十和田湖ひめます”の歴史や物語性を掘り起こし、整理・展示を行う博物館（ミュージアム）施設の整備など、“十和田湖ひめます”ブランドの更なる認知度向上などを図る。

和井内エリアを十和田湖観光の一大拠点とするため、施設整備はもちろん、物販飲食施設や交通拠点性を持たせるなど、奥入瀬、休屋に次ぐ新たな観光機能を創出するため、整備構想を策定する。



◆整備構想（全体像）

□和井内エリアに必要な機能

1. 「道の駅」の機能を備えた交通拠点機能

▽課題

現在、小坂町を訪れる来訪者のほとんどが自家用車を利用している。また、十和田湖を訪れる来訪者も半数以上が自動車を利用した観光客であることから、和井内エリアを中心とした滞留型観光を進める上での交通拠点が不足している。

㊦必要性

十和田湖の小坂町側の観光拠点を整備し、十和田湖の活性化と小坂町中心街への誘導を図るため、交通インフラとして道の駅のような機能を備えた拠点整備が必要となっている。

2. 観光情報提供・案内所機能

▽課題

和井内エリアには小坂町の観光案内所があるが、土日は閉鎖されており、利便性があまり良くない。また、建物の老朽化も進んでおり、場所も分かりにくく、立ち寄りたくなる雰囲気になっていない。

㊦必要性

小坂町の十和田湖観光の拠点として観光案内機能を充実させ、小坂町中心街と十和田湖を結ぶ情報拠点を整備する必要がある。

3. “十和田湖ひめます”ふ化場の観光拠点機能

▽課題

地域ブランド“十和田湖ひめます”の生態や飲食、土産販売を含めたワンストップで体験できる場所がなく、“十和田湖ひめます”の総合テーマパークが新たな観光拠点としてポテンシャル（潜在力）が高い。

㊦必要性

“十和田湖ひめます”の歴史や生態、飲食と土産、さらには体験までできる観光拠点としての機能を充実させ、目的地としての和井内エリアの魅力を伝える施設を整備する必要がある。

◆整備構想（全体像）

□和井内エリアに必要な機能

4. “十和田湖ひめます”のPR機能

▽課題

“十和田湖ひめます”の養魚事業に成功した和井内貞行に関する歴史や物語、和井内を中心とする地域の歴史がわかる施設がなく、当該地域の魅力が充分に来訪者に伝わっていない。

㊤必要性

和井内エリアの魅力を伝えるため、今や一大ブランドとなった“十和田湖ひめます”のPR機能に加え、和井内貞行の歴史や物語、地域の歴史を紹介するための展示施設を整備し、当該拠点への集客力を高める必要がある。

5. 体験型の観光拠点機能

▽課題

十和田湖の体験型観光は、国立公園の自然環境を楽しみながら散策したり、ネイチャー体験をしたりするものが多いが、食の体験に関しては意外と少ない。

㊤必要性

“十和田湖ひめます”を活用し、つかみどり、釣り、焼き、くん製加工など、様々な体験プログラムが提供できる施設を整備する。さらに、小坂町中心街のリサイクルに関する体験もできるようにし、街なかへの誘導を図る。

6. 遊歩道など回遊性機能

▽課題

十和田湖の滞在時間は短く、宿泊施設に関しては休業や閉館が相次いでいる。和井内エリアに拠点性ができること、滞在時間を延ばす散策の拠点として、休平、大川岱方面への回遊性を高めることも必要である。

㊤必要性

和井内エリアの拠点整備と合わせて、休平、大川岱方面への回遊性を高めるための遊歩道整備を行う必要がある。特に水辺を歩ける遊歩道は、十和田湖の自然環境を楽しむのに最適であり、当地の魅力が高まると思われる。

◆整備構想（全体像）

□和井内エリアに必要な機能

7. 十和田湖眺望の機能改善

▽課題

発荷峠をはじめ、十和田湖全体を見渡せる展望台は人気があり、十和田湖を紹介する写真やビデオには必ずと言っていいほどその景色が登場している。しかし、樹木の生長等により眺望が確保できていないところも見られる。

㊦必要性

展望台の眺望を確保するための木々の伐採等の景観保全措置をとる必要がある。十和田湖の魅力を全体像として伝えるためには展望台からの眺望は欠かせない。十和田湖のイメージにも関わる問題であり、早急な対策が求められる。



紫明亭展望台からの眺望

◆整備構想

1. 「道の駅」の機能を備えた交通拠点機能

□課題

▼“十和田湖ひめす”の認知度は徐々に向上してきているものの、十和田湖を訪れる観光客への認知度をさらに高めるためのPR施設が不足している。

▼当地を訪れる観光客のほとんどが自家用車を利用したお客様であるが、こうしたお客様が頻繁に立ち寄る施設が「道の駅」であり、全国的にも地域振興効果が高い。

▼路線バスや高速バスに関して、十和田湖の拠点は休屋や子ノ口を中心としており、小坂町側の拠点が無い。道の駅の整備とともにバスターミナル等の整備を図り、十和田湖に2ヵ所交通拠点を整備する必要がある。

□整備方針

▼十和田湖の和井内エリアは小坂町と十和田湖をつなぐ入口となっており、ここに観光の拠点施設を整備することによって、小坂町中心街の観光が活性化し、十和田湖との有機的なつながりが確保できる。

▼和井内エリアに「道の駅」の機能を備えた交通拠点（和井内観光拠点施設）を整備し、“十和田湖ひめす”を前面に押し出した個性的な施設構成とする。

▼新たに整備する和井内観光拠点施設は、観光案内所のほか、体験型観光の拠点、和井内記念館、ひめすミュージアムなどの様々な施設を集約した総合観光拠点とする。

▼バスターミナルを整備することによって、十和田市の休屋とともに十和田湖に二つの拠点ができることによって回遊性が高まり、小坂町中心街への誘導とともに、弘前や青森方面からのアクセスも改善し、十和田湖観光の魅力がより一層高まると思われる。

【整備イメージ】



「道の駅かみこにあ」
(秋田県上小阿仁村)



道の駅宇目 レストランうめりあ
(大分県佐伯市)



「道の駅「R427」かみ」
(兵庫県・多可町)

◆整備構想

2. 観光情報提供・案内所機能

□課題

▼十和田湖に観光で訪れる観光客で、十和田湖の4割が小坂町であることを知る人は少ない。和井内観光拠点施設で小坂町の観光情報を発信するとともに、観光誘客を行うことによって回遊型観光が促進される。

▼小坂町から十和田湖へ抜ける観光ルートを通る観光客に対しても、十和田湖の4割が小坂町であること、さらには“十和田湖ひめます”の魅力を十分に認知してもらう必要がある。和井内観光拠点施設での観光案内は効果も高く、有効な機能である。

▼小坂町の物販飲食機能を充実させ、“十和田湖ひめます”を使った飲食・土産物を置く拠点が必要となっている。

□整備方針

▼和井内観光拠点施設の観光案内機能を充実し、明治百年通りなどの市街地の観光のみならず、和井内エリアや大川岱地区、休平地区の情報も併せて総合的な観光案内機能を有する施設を整備する。

▼例えば、体験型観光の案内拠点として、またネイチャーガイド等の案内拠点としての機能を併せ持ち、和井内観光拠点施設を核とした観光交流を促進する施設とする。

▼観光ガイドを常駐させて、十和田湖周辺の散策ツアーを行うなど、回遊型の観光機能を充実させる。

▼観光案内機能については、休屋の観光交流センターと連携して情報提供を行うなど、それぞれに特徴を持たせた十和田湖観光の魅力を伝える機能を果たしながら相乗効果を高める。

【整備イメージ】



「男鹿総合観光案内所」
(秋田県男鹿市)



十和田湖ひめます
ひめトロ井



「十和田湖観光交流センター」
(青森県十和田市)

◆整備構想

3. “十和田湖ひめます” ふ化場の観光拠点機能

□課題

▼地域ブランド“十和田湖ひめます”の認知度をさらに向上させ、ブランド価値をさらに高めるため、和井内観光拠点施設を「“十和田湖ひめます”の里」としてアピールする必要がある。

▼現在、“十和田湖ひめます”をどこで見られるのか、どこで食べることができるのか分かりにくい。当地に拠点性を持たせることによって、“十和田湖ひめます”に関する情報を一元化、拠点化し、分かりやすくアピールすることが必要である。

□整備方針

▼和井内観光拠点施設を「“十和田湖ひめます”の里」として整備し、現在のふ化場も活用しながら、実際の養殖過程も見られるような、体験型的水族館展示機能を持たせる。

▼さらに、“十和田湖ひめます”の遡上（そじょう）の時期には、魚道モニターを設置して遡上の様子を見られるような展示機能も持たせる。

▼“十和田湖ひめます”の体験型観光機能として、つかみどりや、釣り体験、さばき体験、焼き体験、くん製などの加工体験といった設備を整える。

▼“十和田湖ひめます”の養殖等に関して「オーナー制度」を設け、産卵から放流、遡上までの過程を公開し、稚魚に名前を付けてオーナーとして管理してもらう。最終的には“マイひめます”を持ち帰っても、食べても、加工してもよく、ファンを育てる試みをつくる。

【整備イメージ】



「イヨボヤ会館」
(新潟県村上市)



「淡水魚館」
(福島県猪苗代町)



「標津サーモン科学館」
(北海道標津町)

◆整備構想

4. “十和田湖ひめす”のPR機能

□課題

- ▼今や一大ブランドとなった“十和田湖ひめす”の認知度が高まっていない。
- ▼“十和田湖ひめす”の養魚事業に成功した地域の偉人、和井内貞行に関する資料が散在し、拠点となる施設も存在していないことから、地域の歴史や偉業を知る機会がなく、資料を集めた拠点施設が必要となっている。
- ▼和井内観光拠点施設「“十和田湖ひめす”の里」に不可欠な和井内貞行の偉業や物語に関するミュージアムが必要であり、和井内エリアの魅力を高め、さらには地域の歴史との関連を踏まえた展示構成が必要不可欠となっている。
- ▼JR十和田南駅前ロータリーに設置されている「和井内貞行銅像」など、同氏に関連する遺産も散在している。これらを発見・発掘し、あらためて歴史的な業績を整理する必要もある。

□整備方針

- ▼和井内観光拠点施設には、“十和田湖ひめす”の認知度を高める展示とともに、和井内貞行を顕彰したミュージアム「和井内記念館（仮）」の整備を行う。散在している資料等を集めて編集し、地域の歴史や物語性のある編集を施し、展示施設としての博物館整備を行う。
- ▼“十和田湖ひめす”の歴史を理解し、実際に見て触って食べられるという、一連の体験型観光行動を創出するためにも、記念館の整備は必要である。また、歴史性を物語る施設によって訴求力を高めていくことが望まれる。
- ▼記念館の整備によって、休平や大川岱への回遊性を高め、和井内神社方面への回遊性を促進する。湖岸を歩く歴史散歩も有効であり、散策コースも含めて検討が望まれる。

【整備イメージ】



「十和田ふるさとセンター」
(秋田県小坂町)



「和井内貞行銅像」
(JR「十和田南駅」駅前)



「和井内神社」

◆整備構想

5. 体験型の観光拠点機能

□課題

▼観光行動の主流は“体験型”に移行しつつあり、食に関する体験や自然環境の体験、生活体験など、様々な分野で広がりを見せてきている。

▼“十和田湖ひめます”は知っているが、どこで見られるのか、触れられるのか、どこで食べられるのかを知っている人は少ない。“十和田湖ひめます”について、一カ所（ワンストップ型）ですべての機能を持った施設が必要となっている。

▼特に、見て、触って、加工体験や食べることができる、体験型の観光を提供することによって、子どもたちへの教育学習的な効果も高く、“十和田湖ひめます”の歴史性や現状を深く知ることにつながる。

□整備方針

▼和井内観光拠点施設の機能の一つとして、“十和田湖ひめます”を見て、触れて、食べられる機能の整備を行う必要がある。

▼和井内エリアにある“十和田湖ひめます”ふ化場を活用して、当該機能を付加した施設として再生、または新設するなどし、総合的な“十和田湖ひめます”とのふれあい体験場とする。

▼“十和田湖ひめます”を見て、触れて、焼いて、加工するなどできる場所として設備を整え、体験型の観光拠点とする。

▼体験観光と合わせて学習機能も充実させ、和井内貞行記念館と連携し、“十和田湖ひめます”の歴史性や地域学習と連動したプログラムを構成する。

【整備イメージ】



つかみどり体験（イメージ）



炭火焼き体験（イメージ）



くん製づくり体験（イメージ）

◆整備構想

6. 遊歩道など回遊性機能

□課題

▼現状では十和田湖西湖畔の遊歩道は、プリンスホテルから十和田ホテルまでの間に整備されているが、ホテル宿泊客以外には歩いていない。

▼また、和井内エリアから当該遊歩道への遊歩道はなく、十和田湖一周の遊歩道や白地山登山道も一部未整備なことから、和井内エリアを拠点とした回遊性促進のための整備と、多言語に対応した標識の再整備が課題となってくる。

▼和井内から休平、大川岱地区方面へのアクセスを良くし、湖岸を歩くエコツアーを創出することによって滞在時間の延長や宿泊需要の増加につながる。

□整備方針

▼国の満喫プロジェクトと連携して、多言語に対応した標識等の再整備と和井内エリアから休平、大川岱方面への西湖畔遊歩道や白地山登山道の整備を行い、和井内エリアから休平、大川岱地区への回遊性を高める。

▼遊歩道の散策については、地域を案内できるガイドを養成し、ネイチャーガイドとともに歴史や和井内貞行関連の史実を踏まえたガイドができる能力を養い、和井内エリアの魅力を高める。

▼冬場の散策ツアーの試みとしては、スノーシューや氷上の体験、雪体験と合わせ、“雪”を楽しめる内容についても検討を行う。

▼また冬物語の時期には、花火とともにイルミネーションなどの工夫を凝らした演出も考え、寒冷地ならではの演出についても検討を行う。

▼さらなる回遊性を高めるため、湖からのアクセスを高めることによって遊歩道との回遊性を高める試みについても検討を行う。

【整備イメージ】



栃木県「塩原温泉ビジターセンター」 群馬県榛名湖の湖上
パークコンダクター遊歩道散策ガイド イルミネーション



かんじき・スノーシュー
(子ノ口から瞰湖台)

◆整備構想

7. 十和田湖眺望の機能改善

□課題

▼発荷峠をはじめ、十和田湖全体を見渡せる展望台は人気があり、十和田湖を紹介する写真やビデオには必ずと言っていいほどその景色が登場している。しかし、樹木の生長等により眺望が確保できていないところも見られる。

▼滝ノ沢展望台はすでに樹木が大きく育った状態で、展望についてはまったく望めない現状にある。

▼その他、甲岳台、紫明亭展望台、鉛山峠、白雲亭展望台などについても、再度見直しを行い、各所の眺望についても和井内観光拠点施設の案内所でその魅力をアピールする必要がある。

▼展望台の眺望を確保するための木々の伐採等の景観保全措置をとる必要がある。十和田湖の魅力を全体像として伝えるためには展望台からの眺望は欠かせない。十和田湖のイメージにも関わる問題であり、早急な対策が求められる。

□整備方針

▼各所の展望台について、その眺望を確保するため、早急な改善を施すため、樹木の伐採等を含む改善策を講じる。

▼また各展望台の魅力を高めるための施策についても検討し、十和田湖の眺望を和井内観光拠点施設でアピールする。

▼各展望台からの景色を写真に撮影してもらい、フォトコンテストを行うなど、展望台と観光を結びつけた十和田湖の魅力を伝える。また写真だけでなく、スケッチ（風景画）についてもコンテストを行うなど、ソフト面でも検討を行う。

【整備イメージ】



発荷峠展望台からの景色

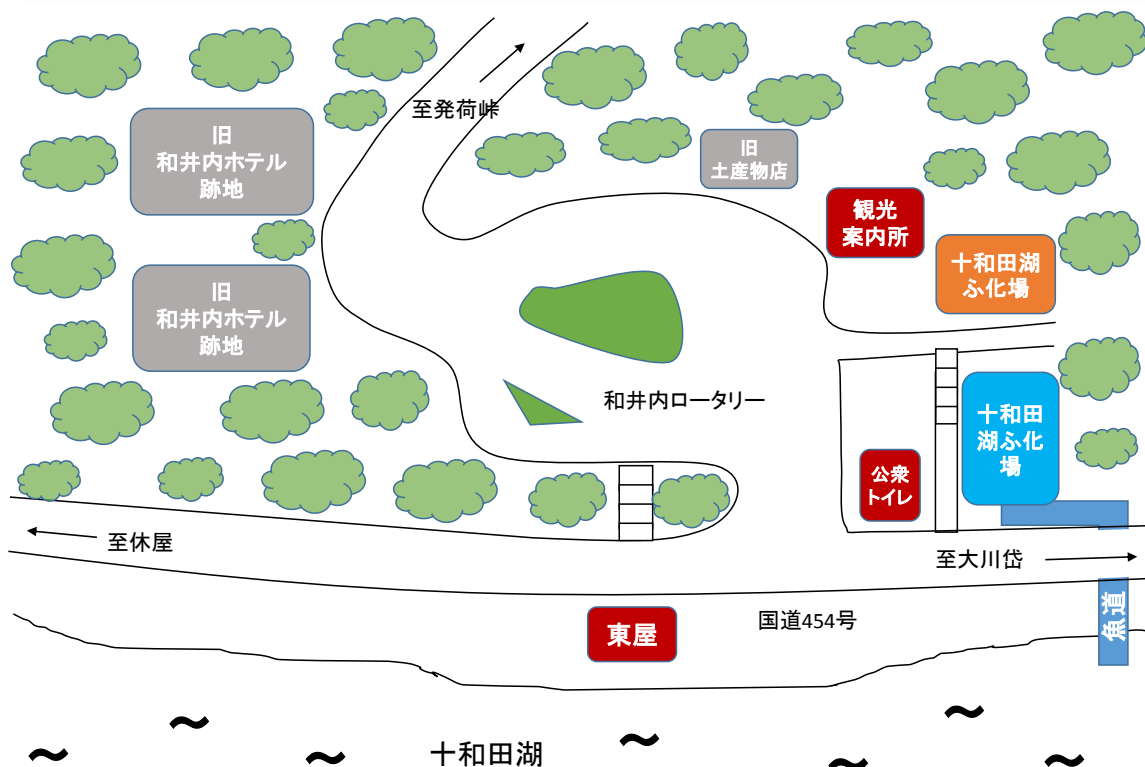


滝ノ沢展望台



紫明亭展望台からの景色

◆和井内エリア配置図（現状）



◆和井内エリア整備構想図



資 料 編

1. 小坂町観光振興計画策定要項

(趣旨)

第1条 この要項は、小坂町観光振興計画（以下「観光振興計画」という。）の策定に関し、必要な基本的事項を定めるものとする。

(基本理念)

第2条 観光振興計画策定の基本理念は、おおむね次のとおりとする。

- (1) 行政と民間の現状及び将来の社会経済動向を踏まえ、小坂町総合計画及び各関係機関が公に定める諸計画との整合性を図りつつ、町の観光施策を総合的に推進するための方向性を明らかにするものとする。
- (2) 観光振興計画は、小坂町総合計画に示された将来像の具現化を図るために必要な各種観光振興関連施策を推進する指針となるものとする。
- (3) 観光振興計画の策定にあたっては、直接的または間接的に町民及び観光客等の声を反映するものとし、策定を通して小坂町の観光の推進について町民の理解が深まり、実施に向けた共同体制が構築されるよう配慮するものとする。

(構成及び内容)

第3条 観光振興計画の構成及び主な内容は、おおむね次のとおりとする。

- (1) 観光振興計画の概要 計画の目的、位置づけ、対象範囲、目標年次等の概要を記載する。
- (2) 観光振興計画への取組みの動向 国、県の施策等観光振興への取組みにかかる社会的動向を記載する。
- (3) 小坂町の観光の現状と課題 小坂町の観光の現状と課題等について記載する。
- (4) 観光振興施策の展開 基本方針、基本目標、施策体系、観光振興施策の詳細等について記載する。
- (5) 観光振興計画の推進 推進体制、人材育成等について記載する。

(期間)

第4条 観光振興計画の期間は、平成29年度から5年間とする。ただし、観光をめぐる社会経済情勢や観光客のニーズの変化に対応し、柔軟に見直しを図るものとする。

(策定体制等)

第5条 観光振興計画は、小坂町観光振興計画策定委員会が策定し、庁議において最終決定する。

- 2 観光振興計画の策定にあたっては、町が関係する観光振興のための会議や観光団体等との連携を図るものとする。
- 3 観光振興計画の策定にあたっては、町民、観光客のニーズを的確にとらえ、計画に反映させるため、パブリックコメント等を行うものとする。
- 4 観光振興計画の策定にあたっては、課を横断する課題の解決のため、各課が主体的に取り組むとともに、所属長の責任のもとに、十分な協議及び検討を行うものとする。

(庶務)

第6条 観光振興計画策定に関する庶務は、観光産業課において処理する。

(補則)

第7条 この要項に定めるもののほか、必要な事項は、町長が別に定める。

附 則

この要項は、平成28年7月11日から施行する。

2. 小坂町観光振興計画策定委員会要項

(目的及び設置)

第1条 小坂町観光振興計画（以下「観光振興計画」という。）を策定するため、小坂町観光振興計画策定委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(担当事務)

第2条 委員会の担当事務は、観光振興計画の策定に関することとする。

(組織)

第3条 委員会は、委員10人以内をもって組織する。

2 委員は、学識経験者、観光関係者及び行政関係者その他町長が必要と認める者のうちから町長が委嘱し、又は任命する委員をもって構成する。

3 委員の任期は、1年以内とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第4条 委員会には委員長及び副委員長を置く。

2 委員長は、委員の互選により定める。

3 委員長は、委員会を代表し会務を総理する。

4 副委員長は、委員長が指名する。

5 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 会議は委員長が招集し、委員長がその議長となる。

2 会議は、委員の2分の1の出席がなければ会議を開くことができない。

3 委員長が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、その説明又は意見を聴くことができる。

(庶務)

第6条 委員会の庶務は、観光産業課において処理する。

(委任)

第7条 この要項に定めるもののほか、委員会の運営に関し、必要な事項は、委員長が定める。

附 則

この要項は、平成28年7月11日から施行する。

3. 小坂町観光振興計画策定委員会 委員名簿

●委員 長

小坂まちづくり株式会社 代表取締役社長

高橋 竹見

●副委員長

かづの商工会 理事・観光業部会長

岩船 勝広

●委 員

環境省東北地方環境事務所十和田自然保護官事務所 首席自然保護官

田畑 慎之介

秋田県鹿角地域振興局建設部 企画調査課長

近藤 重樹

秋田県鹿角地域振興局総務企画部 副主幹

齋藤 隆

道の駅「こさか七滝」 駅長

柴田 和博

十和田湖西湖畔整備誘客促進協議会 監査

成田 和孝

小坂町観光案内人協議会 副会長

海沼 誠子

●事 務 局

小坂町観光産業課 課長

安保 明彦

小坂町観光産業課観光商工班 課長補佐

木村 則彦

〃 課長補佐

對馬 修

公益社団法人日本観光振興協会 総合調査研究所

4. 小坂町観光振興計画策定委員会開催状況

○第1回

日時：平成28年7月29日（金） 10:00～

会場：小坂町役場 1階会議室

議題：（1）小坂町観光振興計画策定要項について
（2）正・副委員長選任
（3）振興計画の策定内容について
（4）意見交換

○第2回

日時：平成28年9月13日（火） 14:00～

会場：小坂町役場 1階会議室

議題：（1）小坂町の観光の各種調査結果、SWOT分析について報告
（2）小坂町の観光の問題点、課題等の検討
（3）意見交換

○第3回

日時：平成28年10月20日（木） 13:30～

会場：小坂町役場 1階会議室

議題：（1）SWOT分析の修正
（2）小坂町観光振興計画の基本的な方向性
（3）意見交換

○第4回

日時：平成29年1月11日（水） 13:30～

会場：小坂町役場 1階会議室

議題：（1）小坂町観光振興計画 報告書（案）
（2）意見交換